

川上村

東中叔倉收納糶肆佰伍拾陸斛捌斗零

右一間迄喜十年十月十五日穀自師天勅位後

圍司 守從五位下清原真人正基
介從五位下上毛野朝臣茂實權掾從七位上伴勢朝臣茂行

都司 擬大領從八位上秋比呂常行
擬少領從八位上利波臣保影

不動 西第一板倉基
長二丈八尺二寸四分 長二丈六尺二寸八分 廣二丈
廣二丈六尺七分 上 六尺二寸高一丈四尺一寸

寨 長五尺五寸四分 長六尺二寸八分 廣四尺
廣四尺八寸五分 上 六寸二分高五尺六寸

底數類福肆佰壹拾束 積高 五寸

收納穀肆佰壹斛 天平實字二年以降 高一丈
天平神護六年以往 三八五寸

大同二年九月十日壬申典儀孫大初傳何保朝臣氏死

使采女佐式位上多治真人真人真成

圍司 掾正六位上根井朝臣御笠凡
少目從六位上瀨野宿新馬澤

都司 擬大領從八位下利波臣保
擬少領利波臣豐成

六替定 長二丈八尺二寸五分 廣二丈
六尺一寸三分高一丈四寸二分 寨 長五尺九寸二分
廣四尺八寸三分

川上村

東中板倉收納糶肆伯伍拾陸斛捌斗叁升

右一間迄喜十年十月十五日段自師天初位係智泰廣範

園司 守從五位下清原真人正基
人從五位下上毛野朝臣茂實權掾從七位上伴勢朝臣茂行

郡司 糶大領從八位上社次臣常行
糶少領從八位上利波臣保影

不動第一板倉基
長二丈八尺二寸四分 長二丈六尺二寸八分 廣二丈
廣二丈六尺七分 上 六尺二寸高一丈四尺一寸

塞 長五尺五寸四分 長六尺二寸八分 廣四尺
廣四尺八寸五分 上 六寸二分高一丈六寸

底數類福肆伯壹拾束 積高 五寸

收納穀壹仟貳佰壹斛 天平實字二年以後 湊 委高一丈
天平神護六年以後 三八五寸

大同二年九月十日壬申典藤孫大初位下何保朝臣良死

使采女佐成位上多治真人真人直茂

園司 椽正六位上根井朝臣御笠丸
少目從六位上瀧野宿禰馬守

郡司 糶大領從八位下利波臣用人
糶少領利波臣豐成

六替定 長二丈八尺二寸五分 廣二丈
六尺一寸三分 高一丈四寸二分 塞 長五尺九寸一分
廣四尺八寸三分

天平寶字
二年以
神護降
六年以
委殺往
大同二年
大委殺
交替使

交替定

天平神護
二年以
委殺往

延喜九年
交替實錄
帳同十年
帳第二不
動倉

收納穀參仟貳佰壹斛 天平寶字二年以神護六年以 滿三尺高一丈

大同二年九月十四日主典蔭孫大初位下阿保朝臣氏丸

使采女佐正八位上多治真人真人貞成 (此號力)

國司 掾正六位上榎井朝臣御笠丸

少目從六位上滋野宿禰馬澤

郡司 擬大領從八位下利波臣田人

擬少領利波臣豐成

交替定 長一丈二寸三分高一丈四分廣二丈六寸塞長五尺九寸一

底敷額稻肆佰壹拾束 積高五寸

收納穀參仟貳佰壹斛 天平神護二年以委殺往 滿五寸缺一丈三尺

竿勘乘沫拾玖斛

定參仟貳佰捌拾斛

延喜九年交替實錄曰濕損缺伍拾斛 填納延喜十年稅帳

不西第二板倉 長四丈二寸五分高一丈四分廣一丈八尺塞長五尺一四寸六分

底敷額稻陸佰沫拾束 積高五寸

延喜十年雜載

貞觀四年
ノ交替

收納穀參任陸佰捌拾肆斛參合肆勺沫撮未滿委高三尺五分

國司 權守從五位下橘朝臣春成

郡司 介外從五位下菅野朝臣高松
大領外正八位上利波臣氏良

郡司 擬大領從八位上利波臣安直

加委穀沫佰壹拾壹斛

合肆仟參佰玖伍斛參合肆勺沫撮
貞觀六年七月八日史生大初位下大私部善子丸

國司 權守從五位下橘朝臣春成

郡司 介外從五位下菅野朝臣高松
轉擬大領大初位下品治部稻積

擬少領飛鳥戶造今貞

不西第三板倉長二丈八尺五寸七分上長二丈八尺三寸四分廣二丈六尺
塞長六尺九寸三分上長六尺五寸五分廣四尺六寸

西第三
動倉

同六年ノ
交替

大同二年
交替

收納穀參任陸佰參斛貳斗玖升伍合貳勺委高一丈四分

大同二年九月十四日主典蔭孫大初位下阿保朝臣氏丸

使采女佐正八位上多治比真人貞成

國司 掾正六位上榎井朝臣御笠丸

少目從六位上滋野宿禰馬澤

郡司 擬大領從八位上利波臣田人

擬少領利波臣豐成

交替定長九寸二分八分高一丈四尺六寸二分五尺塞長三尺九寸三分廣末五尺五分缺四寸
廣四尺六分

同年委穀

收納穀參任陸佰參斛貳斗玖升伍合參勺大同二年滿九寸高三丈四尺

竿勘乘貳佰玖拾陸斛沫斗肆合捌勺

定參仟玖佰斛

不北第二板倉長三丈四寸五分廣二丈九尺四塞長六尺八寸二分
底敷穎稻沫佰伍束積高五寸

收納穀肆仟沫佰伍拾斛沫斗委高三丈九寸五分

延喜十年雜載

北第二
動倉

天長四年
交替

延喜十年雜載

二八二

天長四年十一月廿一日、少目大初位下朝原忌寸四上、

介從五位下藤原朝臣越雄

國司

掾從六位下小治田福雄 少目正八位上武生宿禰二腹

郡司

副擬少領從八位上飛鳥戶造浦丸 擬主政利波宮成

擬主政中臣家成 擬主帳秦人部古綿

交替定寸長三分、高一丈五分、廣二丈九分、四塞長六尺八寸五分、穹隆高一尺八寸、

寸、

底敷顯稻沫伍束積高五寸

動不西第五板倉東長上五丈五寸、下二丈三寸、西長上五丈二寸、下五丈一寸、南廣上二丈三寸、下二丈二寸、北廣上二丈四寸、下二丈三寸、南廣上二丈三寸、下二丈二寸、北廣上二丈四寸、下二丈三寸、

寸三分、

塞長上五尺六寸、下六尺二寸四分、南廣上四尺六寸、下四尺八分、

底敷顯稻陸佰壹拾伍束積高五寸

收納穀陸仟貳佰陸拾斛捌斗伍升捌合貳勺陸撮一委高自他倉屋遷委、

東後外三板倉、納穀肆佰捌拾貳斛參斗肆升貳合伍勺

東後中二板倉、納穀沫佰肆拾陸斛參斗壹升伍合伍勺貳撮

校屋

西第五
動倉

昌泰四年
倉屋納穀
ナ言上ス
失火燒損

東一校屋納穀伍佰參拾肆斛貳斗伍升

東中一校屋納穀捌佰參拾壹斛

東後一校屋納穀沫佰捌拾沫斛

東後二校屋納穀壹仟壹佰壹拾捌斛壹斗壹升陸合壹勺肆撮

東後三校屋納穀肆佰肆拾肆斛捌斗參升肆合壹勺

東後四校屋納穀肆佰伍拾斛

東後外一倉納穀捌佰陸拾參斛

右倉屋納穀去昌泰四年七月三日言上、今件失火燒損穀之內、所全之數、

所委納也、而不全材木、有納物之厄、加以代代交替實錄帳爲不中用穀之、

由注載已了、然而官帳之穀不能除弃、仍遷委全如件、

延喜十年七月九日、史生從八位下紀朝臣廣宗、

守從五位下清原真人正基

國司 權掾從七位上伊勢朝臣茂行

郡司 擬大領從八位上射水臣常行 擬大領從八位上飛鳥戶造嘉樹

擬少領從八位上利波臣春生

延喜十年雜載

二八三

稅屋

東第五屋長七丈一尺廣二丈二尺四寸高一丈七尺收納新穀陸佰壹拾斛
 借東後三校倉收納稻下更納新稻肆仟束
 南二屋收納稻下更納新稻參仟束
 借東外五少倉收納稻下更納新稻壹仟肆佰陸拾束
 借東四屋收納稻下更納新稻肆仟束
 借東後外二屋收納稻下更納新稻參仟束
 借東五屋收納稻下更納新稻參仟束
 西外一屋收納稻下更納新稻肆仟束
 西外二稅屋收納稻下更納新稻參仟束
 東三屋收納稻下更納稻伍仟束
 南三稅屋收納稻 更納新稻壹仟伍百貳拾束
 右十一間延喜十年十月十五日醫師大初位下依智秦公廣範
 守從五位下清原真人正基
 國司 介從五位上毛野朝臣茂實 權掾從七位上伊勢朝臣茂行
 郡司 擬大領從八位上射水臣常行

意斐村
東後第一
板倉

意斐村

擬少領從八位上利波臣保影

東後第一板倉西長二丈六尺四寸八分廣一丈八尺七寸五分高一丈一尺八寸

收納繡陸佰貳斛貳斗參升除年々交替缺定

右一間延喜十年十月十五日醫師大初位依智秦公廣範

守從五位下清原真人正基

國司 介從五位下上毛野朝臣茂實 權掾從七位上伊勢朝臣茂行

郡司 擬大領從八位上射水臣常行

擬少領從八位上利波臣保影

不東後外第三板倉長四丈八尺四寸九分廣二丈塞長八尺四寸五分

底敷額稻玖佰參拾束積高五寸

收納穀陸仟伍佰玖拾玖斛滿尺委高一丈一分

貞觀五年四月卅日博士大初位上御船宿禰有行

權守從五位下橋朝臣春成

國司 介外從五位下菅野朝臣高松

貞觀五年
交替

東後外第
三不動倉

國司守從五位上茨田王

少領外從八位下利波臣虫足

郡司

主政外大初位上叟部北理

交替定長二丈八尺一寸廣二丈六塞長七尺八寸缺三寸

收納穀肆仟貳佰壹拾捌斛貳斗貳升元天平寶字滿積高三丈三尺

竿勘乘沫拾伍斛陸斗肆升

定參仟貳佰玖拾參斛捌斗陸升

動不南第二板倉長三丈八分高九寸二分廣二丈七尺塞長二丈七尺四分

底敷穎稻伍佰肆拾壹束積高五寸

收納穀陸仟貳拾參斛貳斗沫升委高一丈九尺五寸一分

齊衡二年六月廿九日權史生從七位上大友由佐豐成

介從五位下橘朝臣門雄

國司

掾正六位上大原真人宗公

擬大領外從八位上利波臣氏良

郡司 擬大領外少初位下中臣御成

天平寶字
元年ノ委

南第二不
動倉

齊衡二年
交替

西第二不
動倉

延曆三年
交替

同年ノ委
穀

西第五不
動倉

延喜九年交替實錄曰濕損缺伍拾斛填納延喜十年稅帳

動不西第二板倉長三丈二寸高九寸廣二丈六尺七分一塞長七尺六寸五分廣

底敷穎稻伍佰束積高五寸

收納穀肆仟參佰壹拾貳斛沫斗陸升委高七尺一〇寸

延曆三年六月廿二日史生從八位下刑部首越人

掾正六位上藤原朝臣眞繼

國司 大目正六位上平群清足

郡司擬大領從七位上利波臣大田

交替定長三丈二寸高九寸廣二丈六尺七寸缺三寸二分塞長七尺五分乘四寸廣三

底敷穎稻伍佰束積高五寸

收納穀肆仟參佰壹拾貳斛沫斗陸升延曆二年委滿一丈七尺

竿勘乘壹佰捌拾伍斛肆斗玖升

定肆仟肆佰玖拾捌斛貳斗伍升

動不西第五板倉長三丈九尺八寸二丈塞長八尺四

收納穀肆仟肆佰陸拾貳斛沫斗參升肆合陸勺

延喜十年雜載

定捌佰柒拾玖斛伍斗伍升

延喜九年交替實錄曰濕損缺壹斛捌斗柒升伍合填納延喜十年稅帳

西第三板倉長二丈七尺七寸三分廣二丈五尺塞長七尺五寸三分

收納穀參仟伍佰柒拾捌斛柒斗肆升柒合壹勺玖撮滿尺委高一丈三分

元慶七年交替

元慶七年三月十九日史生從七位下佐伯宿禰河雄

國司介從五位下良岑朝臣晨省

擬大領從七位上穗積穀守

郡司 擬少領從八位上利波臣氏高

延喜九年交替實錄曰盜失缺壹拾斛填納延喜十年稅帳

西第六板倉長二丈九尺四寸二分廣二丈六尺三寸五分

底敷穎稻參佰陸拾束積高五寸

收納穀肆仟捌拾斛滿尺委高一丈九寸五分

元慶二年交替

元慶二年三月三日史生從八位上矢部廣宗

國司 介外從五位下大春日朝臣安永

據從七位上伴宿禰有世

北外後不動倉

郡司 擬大領外大初位下品治部鳴雄
擬少領白丁飛鳥戶造貞氏

北外後第一板倉長八尺三寸一分高八尺一丈塞長八尺五寸九分

底敷穎稻參佰捌拾束積高五寸

收納穀壹仟捌拾肆斛陸斗未滿委高七寸

加委穀參佰斛

合穀貳仟壹佰壹拾肆斛陸斗

寬平三年交替

寬平三年三月廿九日史生從七位下小野朝臣真人

國司權掾從八位上橘朝臣正行

郡司擬大領正六位上秦忌寸常岡

延喜九年交替實錄曰濕損缺伍斛柒斗填納延喜十年稅帳

北外第一板倉長一丈三寸高一丈一尺二寸七

收納穀壹仟肆佰肆拾貳斛九斗貳合貳勺滿一尺高二寸

寬平九年八月五日醫師從七位下佐伯宿禰宅主

國司守從五位下橘朝臣秋實

寬平九年交替

北外第一不動倉

據正六位上紀朝臣寅雄

郡司

擬大領正八位下飛鳥戶造春寶
擬少領无位物部連茂生
擬少領无位粟田時世

東後六屋收納穀盡下更納新穀壹佰玖拾貳斛伍斗貳升玖合伍勺

東後四屋收納稻盡下更納新稻貳仟束

借東後外一屋收納新稻參仟束

北外後第二板倉長二丈一分九寸一尺七分七寸八分收納新稻沫仟束

東第五板倉長一丈二尺四寸八寸

東第六板倉長一丈九寸五尺八寸

北外第三板倉長二丈八分六寸一分三寸五分

東第七屋長四丈一尺二寸收納新稻壹萬壹仟束○下闕ク、本書、越中國印

○本書ハ、越中國官倉納穀交替記ト題スレドモ、延喜主稅式及ビ天平

九年和泉監正稅帳等ニ據ルニ、越中國正稅帳ノ斷簡ナルガ如シ、

〔石山要記〕

四古書部

越中國官倉納穀交替記

卷端闕而外題不詳、此外題私記之、後日可改之、○本文

右文裏書傳三昧耶戒私記、此私記却而爲表書、古文却而爲背面、已前古書

皆以如茲准之、

字面押越中國印、其印難讀、亦越中國今村字、有板倉笹倉等號、古七倉之舊

跡云々、

此文中、異畫文字甚多、寶字作窾之類也、一々不遑枚舉、就原本可考矣、

變異、

〔日本紀略〕

醍醐天皇

九月五日、今日大極殿鳴

〔扶桑略記〕

醍醐天皇

九月五日、辛卯、戌刻人魂出自西北入東南又自申

刻至子丑刻、大極殿鳴百餘度、

〔日本紀略〕

醍醐天皇

九月九日、今日烏咋時杭、

〔扶桑略記〕

醍醐天皇

九月七日、癸巳、辰刻烏咋拔時籤、

雜、

〔日本紀略〕

醍醐天皇

三月十三日、京中人突手拍事、

大極殿鳴

人魂

烏咋時籤

延喜十一年辛未

正月 丙戌朔 盡

一日、丙戌日食、四方拜、御藥ヲ供ス、是日、親王公卿等、職曹司ニ會飲ス、

〔日本紀略〕醍醐天皇 正月一日、丙戌、日蝕、廢務、

〔貞信公記抄〕 正月一日、日蝕、廢務、扶桑略記、百練抄、異事ナシ、

〔西宮記〕正月 上 九記云、天慶七年十月九日、仰云、延喜十一年正月一日、日

蝕、廢務、親王公卿侍從大夫等數十人、來向職曹司、盃酌頻下、已及酌、酌召春宮御服、阿波給集會侍從已上、是依元慶例也、其例見故八條式部卿、本康私記、彼

記云、元慶六年元日節會停止、天慶天皇二日可有御元服事、仍停元日宴、以二日可行宴會、彼朔日王卿諸大夫等、參會職御曹司、數盃後、天慶太政大臣語宣、在昔女帝

治天下時、弓削法皇任意下用大藏物、今日取內藏寮御服給大夫已上如何、王卿申云、此事甚面目也、親王以下給御服、各分散、依此記而所准行也者、

〔江次第〕四方 正月 拜 日蝕、年例可尋、延喜十二年日蝕、四方拜、如恆、寅時日蝕、例可尋、

〔江次第〕供一 正月 拜 日蝕、廢務日猶供、延喜十一年二月二日、記、所司供藥、如昨云々、

〔本朝統曆〕六 正大朔、丙戌、已七、日蝕、五分弱、已四、

延喜十一年正月一日

廢務

八條式部
卿私記ニ
依リテ准
行ス

延喜十一年正月二日 三日 四日 五日 六日

三〇〇

二日、**訂節會**、是日、去年ノ早損ニ依リテ、朝賀ヲ停ム、

〔日本紀略〕醍醐天皇 正月二日、丁亥、停朝賀、依去年早損也、於南殿有宴會、

〔貞信公記抄〕 正月二日、上御南殿、

〔西宮記〕正月上 延喜十一年正月一日、日蝕、二日、有節會事、

三日、子戌、仁和寺ニ朝覲行幸アラセラル、

〔貞信公記抄〕 正月三日、行幸仁和寺、

〔御遊抄〕二朝覲行幸 同十一年正月三日、幸仁和寺、新國史

四日、丑己、東宮參觀アラセラル、是日、東宮大饗アリ、

〔日本紀略〕醍醐天皇 正月四日、己丑、皇太子參觀、今日東宮大饗也、

〔貞信公記抄〕 正月四日、東宮入覲、即大饗、

五日、寅庚、右大臣光、大饗ヲ行フ、

〔日本紀略〕醍醐天皇 正月五日、右大臣家大饗、

〔貞信公記抄〕 正月五日、大饗、

六日、卯辛、山科神ヲ官帳ニ附シ、四度幣ニ預ラシム、

〔本朝月令〕四月上巳山科祭 太政官符、神祇官應附官帳、坐山城國宇治郡山科

紫宸殿出御

杜本神二准ズ

神二座事、右得宮道氏人内藏少允宮道良連等去年八月七日解備、件氏神依去寛平十年三月七日奉勅之宣旨、初享公家春秋之祭祀、雖然未附官帳、歲月稍久、望請特被天裁、准杜本神、被附官帳、預四度幣、然則值聖主之昌運、永流神冥之威德、以成感歡、鎮守國家者、中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣忠平宣、奉勅依請者、官宜承知、依宣行之、延喜十一年正月六日、〇年中行事抄、諸社根元記異事ナシ、

七日、辰主、節會、敍位、

〔貞信公記抄〕 正月七日、節會、敍位、

〔公卿補任〕延喜十九年 參議從四位上藤玄上、四、六十、同十一正七從四下、

從四位上源悅、五、六十、同十一正七從四下、

〔外記補任〕二 大外記外從五位下菅野君平正七敍、

〔古今和歌集目錄〕庶人 藤原良風、延喜 十一年正月七日、敍從五位下、外衛

〔一代要記〕醍醐天皇 源延善、從三位、治部卿、延喜十一年正月七日、敍光

孝第二源氏、

〔敍位除目執筆抄〕 延喜十一正六敍位、執筆、

延喜十一年正月七日

三〇一

七種菜ヲ供ス、

〔公事根源〕

正月 供若菜上子

後院ヨリ
獻ズ

内藏寮ならひに内膳司より、正月上の子日は是を奉る也、寛平年中より始れる事にや、延喜十一年正月七日に、後院より七種の若菜を供す、

〔世諺問答〕 正月

七日ニ羹
ヲ食スル
理由

問て云、七日にあつ物をくふは、何のゆへにて侍ぞや、

答、正月は小陽の月なり、また七日は小陽の數なり、よつて朝廷をはじめとして、わたくしの家にいたるまで、宴會をもよほすなり、それにあつものを食すれば、萬病また邪氣をのぞく術なりといふ本文あり、荆楚記といふ文にも、羹を食して人俗病なければ、げふを人日とするこみえたり、延喜十一年正月七日に、後院より七種のわかかなを供すとみえたり、七種わかかなといふは、薺はこべら、せり、菁、御形、すゞしろ、佛の座などなり、北野天神も、和菜羹（金葉集） 啜口と作給ひたれば、むかしより侍りし事にや、

○正月十五日、主水司ヨリ七種粥ヲ獻ズルコト、寛平二年二月三十日ノ條ニ見ユ、

七種若菜
ノ品目

〔参考〕

〔二中歴〕

五歲時

節日由緒

七日正月

採七種羹

七日七種羹（先嘗） 味除邪氣之術也

〔河海抄〕

十三歳上

内宴記曰、弘仁四年、始有内宴、唐太宗之舊風也、正月十二（廿カ）

子日ト菜
羹

三日間、有子日者、伴日行之、藏人式、清凉記等、廿日注曰、廿一二三日之間、若日子日使用之、倚松樹以摩腰、習風霜之難犯、和菜羹而啜口、期氣味之克調、（菅原）

十二種ノ
若菜

從雲林院序、〇寛平八年
閏正月六日ノ條參看

十二種若菜、若菜、薺、菘、芹、蕨、薺、葵、蓬、水蓼、水雲、芝、菘、此中菘はさまざまの說あり、白河院に松を奉りける人あり、僻事なりと仰ありけり、大外記師遠は、小大根のよしを申ける、其説を用られけるよし、舊記にみゆ、七種、薺、紫、蓼、芹、菁、御形、須々代、佛座、四十よりはしめて、數の滿を賀する也、春の初、若菜をつみて、是を便にて祝也、

〔盞囊抄〕

一素問上

七草事（附七種）

正月七日七草、アツモノト云ハ、七種何々、七種ト云ハ、異説アル歟、不一准、或

歌ニハ、

セリナヅナ（ギヤウ） 五行タビラク（コカ） 佛座アシナミ、ナシ是ヤ七種

延喜十一年正月七日

七種菜ノ
異説

七種ノ若
菜

七日七種
羹

延喜十一年正月七日

三〇四

芹五行ナヅナハコベラ佛座ス、ナミ、ナシ是ヤ七クサ、又或日記ニハ、養
繁、五行、スズシロ、佛座、田ビラコ、是等也ト云々、但正月七日七草ヲ獻ズト
云事更ニナシ、年中行事ニハ、

七日、白馬節會、及敍位事、

兵部省、御弓、奏事ト許記シテ、七草ト云事ナシ、十五日ニコソ、獻七種御粥事
註シ侍レ、又資隆卿、八條院、書進、簾中鈔、此定也、彼鈔名物也、豈浮ケル事アラ
ンヤ、又禁中ノ事、年中行事シカンヤ、既廢務マデ註セリ、爭當時事漏哉、旁不
審事也、乍去諸人皆七日ト思ヘリ、何ナル事歟、人可尋也、

〔元寬日記〕ニ 元和二年正月

一同七日、七種之糝之有御祝儀、此事自兼日、儒者、陰陽寮博士、出家等有御尋、
仍銘々以記錄雖獻之、其說區々而不一決、又禁裏被仰遣處、子日之若菜、又
七種之若菜之事、書記之被進、皆不同也、故以所用世俗被定式、彼記文則記
焉、○中略

一七種若菜

人王六十代醍醐天皇之御宇、延喜十一辛未年正月七日、自丹後院（丹後）供七種

九條家ノ
說

儒家ノ說

若菜、是始也、內藏寮并自內膳司、正月上日獻之、

右自九條殿被進記錄也、或云、七種、白穀、大豆、赤豆、栗、栗、柿、小角豆也云々、

一七種粥

人王五十九代宇多天皇ノ御宇、寬平二庚年正月十五日、獻七種粥、是非

若菜之事

右儒家之所獻也、

一 簠簋內傳云、七種之粥、不動明王之七把髮、降伏惡魔云々、

右陰陽博士所獻也、

一七種糝

正月七日食糝事、正月一日云鷄旦、二日云狗日、三日猪日、四日羊日、五日牛
日、六日馬日、七日云人日、人日人生始タル日ナルヲ以、殊更五節句ノ第一
而祝之、此日七種之糝食スル事、萬草生長之故也、

右者自一條殿被獻也、

一七種粥之事

昔天竺佛性國云アリ、其國有一人之外道、號大曇王、三界アラユル所之

延喜十一年正月七日

三〇五

一條家ノ
說

陰陽家ノ
說

釋家ノ說

延喜十一年正月七日

三〇六

大外道也、佛神三寶穢王法妨、其國有加璃帝王、彼責殺於大曇王、其靈崇惱于人民、依之加璃帝王取渠肉、謂還丹、爛藥國士令吞、有病者皆若ヤキ、忽愈病、自其國士豐饒ナリ、長命也、自是承續三國用之、去七日之糝、大曇王肉身切爲肉還丹姿云、故七日節句之初トス、或七種云所謂芹、薺、菁、蕪、蕪、御形トス、右佛師之令沙汰也、

右家々之記録有御上覽、其說區而不一決、依之仰云、七種糝之事、異說多、世俗用來以可是之旨、被仰出、仍用世俗之式、略

〔庖丁書錄〕 若菜

正月の上の子の日に若菜を奉る事、寛平天皇の御宇よりはじまる也、延喜天曆の比にも奉る事有、七種の若菜は、薺はこべら、せり、菁、御形、すゞしろ、佛の座なり、又十二種は、若菜はこべら、ちしや、せり、わらび、なづな、あふひ、芝、るもぎ、水蓼、水雲、松なり、松の字を菘の字に成す説も有、菘はこほねなり、松の字なれば、十一種に松をそへて奉りけるとかや、正月七日に七種の菜を供する事、事文類聚にみえたり、此日は是を食へば、萬病をのぞくと云へり、〔春の七くさ〕 公事根源に、延喜醍醐天皇十一年正月七日に、後院より七種

寛平御宇
ヨリ始ル
トノ説

松尾社家
ヨリ奉ル
七種菜
水無瀬家
ヨリ獻ズ
ル若菜
櫃司供御
所ヨリ奉
ル七種粥

を供す、江家次第に、後院は冷泉院、朱按に、正月七日に、七種を供せしは、この御時よりことはじまるなるべし、おほよそ若菜とは、ひろく春くさの初苗をさしていふ名なり、略中又公事根源に、天曆六十二代四年二月二十九日、女御安子の朝臣、若菜を奉るよし、李部王の日記にみえたり、李部王は式部子喜なり、若菜を十二種供する事あり、其種々は、若菜はこべら、菘、せり、蕪、なづな、あふひ、芝、蓬、水蓼、水雲、蕪一に松と見えたり、略中天曆の御時に、十二種の名物は備たれど、七種の名物はいまだ詳ならず、略中或はいふ、今松尾の社家より奉る七種は、芹、なづな、御形はこべら、佛の座草は周定王、菘荒本なり、すゞな、かぶ、すゞしろ、大根、又あるひはいふ、今水無瀬家より獻する若菜の御羹は、青菜と薺ばかりなりとぞ、また櫃司供御所より奉る七種の御粥は、薺を少しまじへて奉るといへり、以上三説は皆傳へ聞たる事なれば、またしくあらす、今關東にて七種の粥といふは、青菜となづなをまじへて祝ふなり、

〔古今要覽稿〕四十六部 七種菜な

七種の若菜を以て、これを正月七日禁中に奉りしは、醍醐天皇の延喜十一年を始とす、公事根源それより以前、宇多天皇の寛平二年正月上の子日、内藏寮

延喜十一年正月七日

三〇七

延喜十一年正月七日

三〇八

より若菜を奉りし事ありと 同上いへども、七種を薺、藜、蕪、芹、菁、御形、酒々代、
佛座に定められしは、四辻左大臣を始とす、河海抄には、緹を藜に作り、酒々
代を須々之呂に作りたり。
一説に、七種は芹なづな、御形、田平子、佛の座、あしな、耳なし也と 鈔、藜いひ、或
は芹、五行、薺はこべら、佛の座、すゞな、耳なし也といひ、又或日記には、芹、薺、藜
蕪、五行、すゞしろ、佛の座、田平子也とも 同上いへり、然りといへども、枕草子
に、七日の若菜を、人の六日にもてさはぎ、とりちらしなどするに、みもまら
ぬ草を、略中みゝな草となんいふといふものゝあれば、うべなりけり、きか
ぬがほなるはなご笑ふにとみえたり、此みゝな草は、即藪囊鈔にいほゆる
耳なしと一物にして、今も俗にみゝなぐさといふものなり、清少納言の見
もまらぬ草を、子供のもてきたるといへる文によれば、此頃までは、耳なぐ
さは、七種の數には入らぬ草にて、清少納言も、はじめ、此草をばみし也、さ
れど藪囊鈔に載る所の兩説の七種菜は、永觀の頃よりは、はるかに後の人
の作りしものなる事あるし、或はいふ、今松尾の社家より奉る七種は、芹、な
づな、御形、ぐさ、こはこべら、佛の座、これは救荒本草の風すゞな、かぶすゞし
ろ、大根なり、また別本公事年中行事に圖を出したるは、芹、なづな、御形、こは

き、佛の座、おほこはこべら、すゞしろ、大根、すゞな、かぶなり、今關東にて七種の
粥といふは、青菜と薺をまじへて祝ふなりといへり、凡七種の粥を禁中に
奉りしは、梁の宗愨が荆楚歲時記に、正月七日俗以七種菜爲羹といへるに
もとづかれしものなれども、其七種は、西土の人といへども、後世に至りて
は、まゑるものなきによりて、本邦にては、季冬より初春をかけて、生出る種々
を以て、強てその數に合せしものなるべければ、家々にて、その説まちく
なりといへ共、(善成)四辻左大臣の説最ふるし、故に今その説に従ひて、品物をわ
かちしなり、扱關東にては、青菜と薺をまじへて祝ふといふといへども、そ
れを打はやす俎板の上には、火箸、播槌、庖丁、杓子、わり薪等の五種をならべ
て、七種の數に合せ、そのうちの杓子、或は播槌などにて打はやすなり、その
打はやす時の祝詞、關東にては、なゝくさなづな、唐土の鳥と、日本の鳥と、渡
らぬ先にといへるを、備後の福山にては、唐土の鳥の、日本の土地へ、渡らぬ
先にといへり、これは歲時記に、正月夜多鬼車鳥度、家々搥牀、打戸、振狗耳、滅
燈燭、禳之といへるにやゝ似たり、岡村尙謙曰、公事根源に、延喜の時、後院よ
り七種の若菜を奉りしといひしは、恐くは、一條禪閣の傳説をかきまゑるさ

延喜十一年正月七日

三〇九

延喜十一年正月七日

三一〇

れしにて、其實は延喜御記にいへるが如く、たゞ若菜のみを奉りしものな
るべし、されば今櫃司の供御所より奉る七種の御粥は、薺を少しまじへて
奉ると春の七いへり、これは却て延喜の頃の遺風にもあるべきにや、御
形、田平子、佛座などいへる名は、まさしく後の世の俗稱にて、延喜式、新撰字
鏡、和名鈔等には、その名なきにても、七種のわかかなは、延喜の頃のものは
あらざることをえられたり、もしその頃のものにて、いづれの野にも、冬より
春かけて、よく生出るものは、芹、薺、を俗にいふはき、娘菜也、おほばこ、うつぼくさ、夏
草は、こはこべら、これや七種にてもありぬべし、されど、文徳實録、日本後
紀等の諸書に、絶てその事のなきをみれば、いづれにも、延喜の頃には、七種
の若菜を奉りしものにては、あるべからずといへり、これまた一説なり、
〔人日七種考〕正月七日に七種を獻する事は、公事根原に、延喜十一年正月
七日に、後院より七種の若菜を供することあり、又十二種若菜の次に、尋常の
若菜は七種の物也、薺はこべら、芹、薺、御行、すゞしろ、佛の座などありと見ゆ、
又歌に、芹なつな御形たびらこ佛の座すゞなすゞしろ是で七草とあるに
よりて、はこべをばたびらことす、按ずるに、香月牛山の食鏡には、黃瓜菜を

多比良古、又佛坐、人日七種之一也とし、三餘抄には、黃瓜菜を佛坐とし、臭菜
をたびらことす、しかれども多識編に、臭菜を黃瓜菜の一名とす、別種にあ
らず、本草綱目を按ずるに、是は東國の方言に、たこじなど云草にて、田平子
は一名二種なり、一は漢名藜蘆、和名はこべ、又一種は日本歲時記にも、漢名
を云はず、其餘諸書に考ふるに、和草なるべし、十月に水中に生出るものな
り、又一説に、佛坐は落臺といへり、諸説同じからざれども、實はつくしなり、
つくしは土筆とありて、和名抄よりこのかた、本字定かならず、香月氏は、肇
慶府志を引て、筆頭菜とす、是なるべし、すゞしろは、拾芥抄に、須須志呂とあ
りて、本字を載せず、然れども、蘿蔔なる事明なり、御形は、食鏡に、鼠麴草、和名
母子草とす、按ずるに、文徳實録に、田野草あり、俗に母子草と名づく、三月三
日、毎に婦女探て蒸し、つきて糕となし、歳物に用ふると、第一の巻に見えた
り、すべて古き物にある草の糕は、此母子草にて造るなり、蓬を用るは、中古
以來の事なり、再び詳しく考るに、古の母子草は、鼠麴草にはあらず、下野の
人かぶなとよぶ草なり、田の中に早く生じ、三四月に紫の花ありて、薺に似
たり、山中の人は探てつき、糕に作るに味佳なり、此を以て蓬にかゆる者な

延喜十一年正月七日

三一

七種菜ハ
土地ニ依
リテ異同
アリ

七種ノ菜
ヲ獻ズル
場所

り、山中には古風の残る事多く、是古の草糕の、今に其遺風の有ものなり、且
黄瓜菜を以てつくしにかへ、一種の水中のたびらこを以て、はこべにかへ、
鼠麴草を御形になしたることは、土地によりてつくしも出ず、蓬も正月無
き故に、しかせしを、先哲も悉く其本を尋ねず、其處々にて用ひ來るを見て、
物に記したるものなり、畢竟拾芥抄などにも、七種貢獻の地を載せず、七種
の名のみにて、かく年久しき間に、地下の用ゆる品の同じからざるにて、諸
家の説ひとしからずなりたるなり、河内國の人、釋の松柏堂か師承の抄物
に云ることあり、慥かなるものなり、其書に云ふ、七種の若菜を獻するは、弘
仁年中に、初めて七野の若菜を獻進す、蓮臺野は御形、よもぎなり、朱雀野は
田平子、はこべなり、加茂野は佛坐、つくしなり、紫野はすゞな、蕪なり、五行野
はすゞしろ、蘿蔔なり、平野は芹なり、北野は薺なりとあり、是古よりして貢
し來れる七種の若菜なり、七野は近來印本の名所車と云ふ書に、方角をあ
げて、皆洛外の地、三四里の邊に有り、或家の舊記には、五畿内諸方にあるよ
しなれ共しからず、皆山城の地なり、此比常陸の人某が、都にて七草を見た
るに、つくしは長さ四五寸許にのびたるものあり、いまは帆立草と唱ふと

いへり、又加茂真淵翁の門人藤原美波留が著せる百人一首抄に云、近時毎
春、松尾社司若菜進獻すこと、若菜二合の圖を擧げたり、併せ見るべし、

八日、^巳後七日御修法、

〔東寺長者補任〕一 長者少僧都觀賢 後七日、

九日、^甲女敍位、

〔貞信公記抄〕正月九日、女敍位、

十三日、^戌地震雷鳴、

〔貞信公記抄〕正月十三日、此夜地震、鳴雷、

〔扶桑略記〕^{二十三}裏書 正月十三日、^戌地震、

除目、中納言藤原忠平ヲ大納言ニ、權中納言紀長谷雄ヲ中納言ニ任ズ、

〔公卿補任〕^四

中納言從三位藤忠平、^{卅二}右大將春宮大夫、使別當、正月十三日任大納

言、右大將春宮大夫如元、

權中納言從三位紀長谷雄、^{六十}正月十三日轉正、

參 議正三位藤有實、^{六十}左衛門督、正月十三日兼近江守、

延喜十一年正月八日 九日 十三日

延喜十一年正月十三日

三一四

從四位上同道明五、左大辨勘解由長官伊與守、正月十三日任權

中納言、敍從三位越六

從四位下同清貫四、右大辨、正月十三日讚岐權守、

從四位上源當時四、五月十三日任、二月七日右兵衛督兼字給之、

〔公卿補任〕延喜十七年 參議從四位上良峯衆樹五、同延喜十一正十三右近

權中將、

〔公卿補任〕延喜十九年 參議從四位上橘良殖六、同延喜十一正十三近江介、

〔公卿補任〕延喜二年 參議從四位上伴保平七、同延喜十一正十三若狹守、

〔公卿補任〕延喜四年 參議正四位下源清平五、同延喜十一正十三大和守、

〔公卿補任〕延喜七年 參議從四位上大江朝綱六、同延喜十一正十三文章生、

廿六、

〔外記補任〕二

大外記外從五位下菅野君平正、十三日任淡路守、

菅野利蔭 正十三任六十、

少外記紀貞助 正十三任五十、

〔古今和歌集目錄〕庶人 橘長盛延喜十一年正月十三日轉大丞式部、

紀淑人延喜十一年正月十三日兼備前權大掾、

藤原忠房延喜十一年正月十二日中、古歌仙三十六、任左近權少將、

高向利春延喜十一年正、十三日轉介武藏、

凡河內躬恆延喜十一年正月十三日任和泉權掾中、古歌仙三十六、

〔貞信公記抄〕正月十一日、議始、

十三日、除目、任大、

〔敍位除目執筆抄〕延喜十一正十一日縣召十三、入眼、執筆中、納言忠平今、

十六日辛、節會、

〔貞信公記抄〕正月十六日、節會如例、

十七日壬、射禮、

〔貞信公記抄〕正月十七日、不行幸、仍公卿對豐樂院行事、

十八日癸、賭弓、

〔貞信公記抄〕正月十八日、右勝、

〔北山抄〕八、賭射、大將要抄、延喜十一年、左近宇治部當茂矢、立的缺落之所、有

延喜十一年正月十六日 十七日 十八日

三一五

勅シテ的
定ノ中否ヲ

延喜十一年正月二十一日 二十二日 二十六日 二十八日

三一六

勅不爲的

二十一日丙午内宴ヲ停ム、

〔日本紀略〕醍醐天皇 正月廿一日、止内宴、

二十二日丁未殿上所充、是日、源公忠ニ昇殿ヲ聽ス、

〔貞信公記抄〕 正月廿二日、定殿上人所々別當、

〔三十六人歌仙傳〕 從四位下源朝臣公忠 延喜十一年正月廿二日昇殿、
廿

三、

二十六日辛亥政始、

〔貞信公記抄〕 正月廿六日、辛亥、政始、

二十八日癸丑伊勢皇大神宮別宮田邊氏社ヲ四度幣ニ預ラシム、

〔類聚神祇本源〕十内宮別宮篇 度會郡社 合四十所之中略○中

田邊氏社 荒木田氏神社、天御中主尊二十世孫、天見通命是也、略○中

延喜十一年正月二十八日官符預四度案上幣畢、

荒木田氏
神

二月丙辰朔

二日、山城梅宮神ニ正三位ヲ授ケ、近江小杖神ニ從四位下ヲ授ケ、

〔日本紀略〕醍醐天皇 二月二日、詔授梅宮坐梅宮神正三位、近江國小杖神從四

位下、

公卿著座

〔貞信公記抄〕 二月二日、丁巳、丑二點著官、□點著外記竝西門、

〔西宮記〕十一前田家本 臨時戊 公卿著座事 延喜十一年二月二日、丁巳、丑二剋

四人著權中納言道明、參議當時、大納言貞信、中納言長谷雄 等皆同日丑二剋著云々、此時天網遁甲家所重制云々、

〔職掌部類〕 公卿著座事

延喜十一年二月二日、丁巳、丑二刻同時四人、大納言貞信、中納言長谷雄、權中納言道明、參議當時、此時

天網遁甲家所重制云々、

八日癸亥官奏、

〔貞信公記抄〕 二月八日、癸亥、□候官奏、

十日乙丑美濃東天神ニ從五位下ヲ授ケ、

〔日本紀略〕醍醐天皇 二月十日、授美乃國東天神從五位下、

延喜十一年二月二日 八日 十日

三一七

遁甲家ノ
禁忌

延喜十一年二月十五日

十五日、庚午、除目、

〔公卿補任〕 四

參議從四位下藤清貫、五、四十二月十五日轉左大辨、春宮亮如元、

從四位上藤興範、六、六二月十五日任、式部大輔如元、

〔公卿補任〕 四

參議從四位下橋澄清、五、三同十一、二十五勘解由

長官、

〔公卿補任〕

參議從四位上藤保忠、廿三、同十一、二十七右中將

〔公卿補任〕

參議從四位上源悅、五、六二月十五日大宰大貳、

〔公卿補任〕

參議從四位下平伊望、四、六同十一、二十五兼勘解由

次官、

〔公卿補任〕

參議正四位下藤伊衡、五、九十一、二十五左兵權佐

〔神祇伯補任〕

兼見王 延喜十一、二、任伯、〇古今和歌集目錄同シ、

〔貞信公記抄〕

二月十四日、議始、

十五日、除目、

〔敍位除目執筆抄〕

延喜十一、二月十四日京官、十五 執筆、

議始

別納租穀、及ビ田租春米、交易雜物等ヲ立用セザル諸國ノ稅帳ヲ返却セシム、

〔政事要略〕

五十七 雜公文事上 交替雜事十七

太政官符 民部省

應返却不立用別納穀、并租春料、及交易雜物直之諸國稅帳事

右檢案内、別納租穀之數、去延喜七年十一月十三日、每國立限、田租春米之國、同十年六月十九日、改定已畢、又年料交易雜物、(符カ)雜詳載式條、而或國司等、乖違格式、不割置別納之數、不動備租春之色、位祿王祿度年不行、諸衛大糧、逐日難納加之年料交易物、頻言上正稅用盡之由、曾無貢進物實之勤、恣充國中之雜用、既忘公用之闕乏、不立新制、何改舊、(脫カ)右大臣宣奉勅、件等三色之料、若有不立用稅帳者、宜返却其帳、令填將來者、省宜承知、依宣行之符到奉行、

延喜十一年二月十五日〇本書天慶二年閏七月五日ノ官符ニ十二月廿五日ニ作ル、

二十三日、戊寅仁王會、

〔貞信公記抄〕 二月廿三日、戊寅仁王會、

國司等格
式ニ乖ク
位祿王祿
行レズ諸
衛ノ大糧
未納アリ
正稅ヲ用
盡シ公用
闕乏ス

延喜十一年二月二十三日

延喜十一年三月四日 十一日 二十日

三月大西朔盡

四日戊子直物、

〔貞信公記抄〕三月四日、行直物事、

十四日、直物、

〔公卿補任〕

大納言之後、不去別高例 大納言從三位藤原忠平、廿二、三月日使別當如元、

〔官職祕抄〕

上 大納言 略 ○中不避檢非違使別當例、貞信公 能有公、

○十四日直物、及ビ藤原忠平ヲ檢非違使別當ニ任ズルコト、便宜合斂

ス、

十一日乙未、旬、官奏、

〔貞信公記抄〕三月十一日、上御南殿、奉仕官奏、

十六日、上御南殿、有官奏、小臣、

○十六日旬及ビ官奏、便宜合斂ス、

二十日甲辰、方略試、

〔類聚符宣抄〕

九 方略試

大納言藤原卿宣、宜令式部少丞菅原淳茂、問文章得業生藤原有聲、方略之策

紫宸殿出

問者菅原淳茂

者、

延喜十一年三月廿日

大外記阿刀宿禰春正 奉

廿二日、仰少錄忠宗是忠了、

二十三日丁未、季御讀經、

〔日本紀略〕

醍醐天皇 三月廿三日、季御讀經、

〔貞信公記抄〕

三月廿三日、丁未、内御讀經、

二十七日辛亥、東宮御讀經、

〔貞信公記抄〕

三月廿七日、辛亥、宮御讀始、經既力

二十八日壬子、加賀瀧神ニ從四位下ヲ授ク、

〔日本紀略〕

醍醐天皇 三月廿八日、授加賀國瀧神從四位下、

三十日甲寅、東宮弓場始、

〔貞信公記抄〕

三月十一日、次參東宮、爲有弓場始事也、

卅日、宮有弓場、結既力 方獻物、

延喜十一年三月二十三日 二十七日 二十八日 三十日

延喜十一年四月一日 十一日 十二日

四月乙卯朔盡

一日乙卯平座

〔日本紀略〕醍醐天皇 四月一日平座

〔貞信公記抄〕 四月一日侍從宜陽殿西廂

十一日乙卯旬官奏アリ、

〔貞信公記抄〕 四月十一日、上御南殿有官奏、

十二日丙寅文德天皇ノ皇女源淵子薨ス、

〔一代要記〕文德天皇 滋子 貞觀三年四月賜源姓、延喜十一年四月十二

日薨、

〔本朝皇胤紹運錄〕

文德天皇

源滋子貞觀三四賜姓
母滋野氏

〔皇胤系圖〕

文德天皇

源本有 母攝津守滋野貞雄女、

源滋子 母同本有、

〔三代實錄〕

清和天皇 貞觀三年四月廿五日己巳、文德天皇皇子男二人、女

三人未定名號、是日或爲親王、或爲朝臣、中略源朝臣淵子、母滋野氏是也、

○淵子、諸書滋子ニ作ル、今三代實錄ニ據ル、中略源朝臣淵子、母滋野氏是也、

二十二日丙子豐前宇佐八幡宮ヲ修造セシム、尋テ、守藤原是房ヲ專當ト爲

シ、造宮ノ事ヲ勤メシム、

〔石清水文書〕

五田中家文書附錄
宮寺緣事抄字佐四官符等

太政官符 大宰府

應以豐前國權掾八多有臣爲專當、令勤彼國八幡大井宮造作事、

右得彼府去八月廿日解狀稱、太政官去延喜十一年四月廿二日符備、彼府去

延喜九年十二月廿三日解備、豐前國解備、檢案内、件宮御殿雜舍等以卅年爲

限、改作式例、依太政官去元慶四年十二月廿五日符旨改造、寬平元年七月十

三日造了、而改造之後、未及年限、去延喜二年正月十一日、得大井宮移備宮殿

破損、雨露濕漏、四方門玉垣等、皆悉顛倒、早被言上、將令改造者、國司加實檢、所

陳有實、仍言上、大宰府差使實檢、事已有實、仍修理狀、謹請官裁者、右大臣宣、奉

延喜十一年四月二十二日

三三三

紫宸殿出御

賜姓

三十年ナ
改造ノ期
トス

宮殿破損

延喜十一年四月二十六日 二十八日

三二四

勅、宜仰下府司、早令修理者、府差前主神大中臣伊定令行事、而伊定徒積年紀、不勤造作、破損彌倍、望請停修理事、被遣改造使、令勤作事者、同宣奉勅、止、停遣使、一向令國司行修造事者、府宜承知、依宣行之、仍須彼國守藤原朝臣是房、專當其事、早令畢作事、略、中

延木十三年十二月廿九日

○大宰府ヲシテ、豐前宇佐八幡宮ヲ修理セシムルコト、二年正月十一日ノ條ニ、專當國司藤原是房逃亡スルニ依リ、權掾八多有臣ヲ以テ專當ト爲シ、修造ノ事ヲ勤メシムルコト、十三年十二月二十九日ノ條ニ見ユ、

二十六日、庚辰、公卿座ヲ改メシム、

〔西宮記〕

臨時一外記政本
○前田家大永鈔本

天德三年四月十三日、外記云云々、依左大臣

宣修理建春門、任延喜十一年四月廿六日例、公卿坐可敷北方官人坐所之由、召仰府生山良基了、

二十八日、壬午、除日、

〔公卿補任〕

四

參議從四位下藤清貫、五十四、四月廿八日兼式部大輔、去亮、(春宮)

從四位上藤興範、六十四、四月廿八日兼大宰大貳、去亮、(式部)

〔公卿補任〕

延四
延喜十三年

參議從四位下橘澄清、三十五、同四月廿八日左中辨、(延喜十二年)

〔公卿補任〕

延四
延喜十五年

參議從四位下藤恆佐、卅六、同十一、四廿八兼春宮亮、(延喜)

〔貞信公記抄〕

四月廿八日、除日、

〔類聚符宣抄〕

八、任符事、免本任放還事

大藏少丞清原常松謹言、

請被免本任放還之宣旨、下式部省狀、

右常松、去二月十四日任掃部允、而沈重病、未向任官之間、去四月廿八日遷任

大藏少丞、望請宣旨下式部省、被免件責、今注事狀、謹言、

延喜十一年五月十五日

大藏少丞清原常松

大藏少丞正六位上清原真人常松

右被右大臣宣儀、件人去二月十四日任掃部允、而詔後依身病、未到彼寮之間、

延喜十一年四月二十八日

三二五

延喜十一年四月是月

三二六

去四月廿八日遷任大藏少丞、宜仰式部省、莫令責本任放還者、

同年六月十三日

仰式部少錄安野逸群了、

大外記菅原利蔭奉

直任

〔辨官至要抄〕江〇近直任中辨例

左中辨從四位下橘澄清 延喜十一四廿八任、元勘長官、

辨官兼八省補例

辨官兼八省輔例

左大辨從四位下藤清貫 延喜十一四廿八兼式部大輔、

是月、大宰大貳源悅赴任セズ、因リテ其位記ヲ收ム、

〔日本紀略〕醍醐天皇四月某日、被問太宰大貳源悅、

〔新儀式〕五臨時下朝士若有罪者、隨其輕重、或追位、或解官、大臣奉勅、宣

下所司、令追位記毀之、其儀見儀式、〇中近則延喜十一年從四位下源悅不赴太宰大貳之任、〇中之類也

〔北山抄〕四拾遺雜抄下延喜十一年、〇中天慶後等例、給官符於京職、

〇悅ヲ大宰大貳ニ任ズルコト、二月十五日ノ條ニ、本位ニ復スルコト、

十三年正月二十八日ノ條ニ見ユ、

五月小申盡

一日、甲申旬

〔貞信公記抄〕五月一日、御南殿、

〔北山抄〕四月中要抄上延喜十一年五月、給粽甘葛煎等、其儀同水魚也、

四日、〇中勘解由使ヲシテ、交替式ヲ修撰セシム、

〔類聚符宣抄〕六文譜

勘解由使

請被下宣旨、借行天長格抄一部卅卷事、在外記曹司

右謹檢案内、使司依太政官去年五月四日符旨、修撰交替式、〇中

延喜十二年六月九日

勘解由使

請被下宣旨、借行雜書事、〇中

右謹檢案内、使司依太政官去延喜十一年五月四日符旨、修撰交替式、〇中

延喜十四年九月十日

延喜十一年五月一日 四日

三二七

紫宸殿出
御
粽甘葛煎
ヲ給フ

延喜十一年五月十日 十一日 二十七日

三二八

○交替式修撰ニ依リテ、勘解由使ニ、天長格抄ヲ貸與スルコト、十二年八月二十三日ノ條ニ、官曹事類、大同抄ヲ貸與スルコト、十四年十月十六日ノ條ニ、勘解由使、内外官交替式ヲ奏進スルコト、二十一年正月二十五日ノ條ニ見ユ、

十日、^巳大安寺講堂竝ニ坊舎燒失ス、

〔一代要記〕^{醍醐}天皇^{延喜}十一年辛未、大安寺講堂三百坊百二十四間燒、

〔興福寺別當記〕^上真覺^{院住東}

延喜十一年五月十日夜、東大寺坊舎不殘炎上、

〔參考〕

〔埤史料〕^{四十五}醍醐天皇事記十五 按、東大寺要錄、雜錄、別當次第等、不載此災、疑

是大安之誤也、

十一日、^{甲午}旬、

〔貞信公記抄〕五月十一日、上御南殿、

二十七日、^{庚戌}曆博士千門等、過狀ヲ上ル、

〔扶桑略記〕^{二十三}醍醐天皇^上書 五月廿七日、庚戌、曆博士千門等、依日食誤進過狀、

紫宸殿出御

日食ノ誤ニ依ル

二十九日、^{壬子}雷鳴陣、

〔北山抄〕^九雷鳴陣^{羽林要抄} 延喜十一年五廿九、左中將定方、依内侍宣行解陣

事、

延喜十一年五月二十九日

三二九

延喜十一年六月一日 十一日 十五日

六月癸丑朔

一日癸丑日食

〔日本紀略〕醍醐天皇 六月一日、日蝕、但雨降、

〔貞信公記抄〕 六月一日、日蝕、

〔扶桑略記〕二十三裏書 醍醐天皇上 六月一日、癸丑、日食、廢務、但自未時雨降、

十一日癸亥穢二依リテ、神今食ヲ停ム、

〔日本紀略〕醍醐天皇 六月十一日、依犬死穢止神今食、

〔貞信公記抄〕 六月十一日、依穢神今食止、

十五日丁卯法皇、亭子院ニ於テ、宴ヲ侍臣ニ賜フ、

〔日本紀略〕醍醐天皇 六月十五日、太上法皇於亭子院、賜酒於侍臣、令中納言紀

朝臣記事、

〔伏見宮御記錄〕新寫九 紀家集 亭子院賜飲記

延喜十一年歲次辛未、朝野群載ニ夏六月十五日、太上法皇開水閣排風亭、別

喚大戶、賜以淳酒、蓋神觀之暇法慮之餘、遣避暑之情、助送閑之趣、也、然應其選

者、唯參議藤原仲平、兵部大輔源朝右近衛少將藤原兼茂、藤原俊其出羽守藤

長谷雄賜
飲記ヲ書

仲平等八
人選ニ應

藤原伊衡
駿馬ヲ
賜フ

齋內親王
等供奉セ

原經邦、兵部少輔良岑遠視、左兵衛佐藤原伊衡、散位平希世等八人而已、論贊

當時無雙、名號甚高、雖飲酒及石、論以水沃沙者也、爰有勅命、限二十盃、在內點

墨、定其痕際、不增不減、深淺平均、遞在稱雄、在口而飲、及六七巡、滿座酩酊、不導

寒溫、不東西、數稱見風、起居不靜、其尤甚者希、也偃臥門外、次亦極者仲平、嘔吐

殿上、其餘我西非我泥之又泥、或魂銷心迷、尸居、不結語、戾鳥嘯難辨、

至如經邦者、始論快意氣陽々、陽々、朝野群載、扶桑略記、揚々、終事反瀉、窮

聲喧々、纔不亂者、伊衡一人、殊有抽賞、賜一駿馬、事止十盃、巡ニ扶桑略記不更復

酌于時光、景漸暮、笙歌數奏、論々纏論倒載而歸、有一病臣、不飲獨醒、其不更復

走筆記之、嗟乎、始聞其名、皆謂伯論再相抗、至見其實、即雖病老半死、庶

幾可及古之所謂羊公鶴者、諸君之喻歟、本書濕損アリ、朝野群載、本朝

十六日辰戌穢二依リテ、大神宮月次祭延引ス、尋テ、之ヲ追行ス、

〔伊勢公卿勅使雜例〕 御祭式日延引例

延喜十一年六月祭日、十六日度會宮月次祭、十七日大神宮月次祭有馬斃損穢朝使齋內親王不

被參入二宮、但過穢日供奉事云々、子細見承平五年宣旨也、

是月、霖雨、京師洪水、

延喜十一年六月十六日 是月

長谷雄著
雨賦ヲ作

延喜十一年六月是月

三三二

〔日本紀略〕

醍醐天皇

今月霖雨不休、京都洪水泛濫、中納言紀朝臣作苦雨賦、

〔扶桑略記〕

醍醐天皇

六月有洪水、○皇代略記、

七月大正朔

四日乙酉穢ニ依リテ、廣瀨、龍田祭ヲ停ム、

〔貞信公記抄〕七月四日、依穢祭止、

〔參考〕

〔九條年中行事〕

七月

四日、廣瀨龍田祭事、廢務、

七日戌子乞巧奠、

〔年中行事秘抄〕

七月

乞巧奠事 穢中乞巧奠例

相尹記、正曆元年七月七日、乞巧奠、大內雖有穢氣、依延喜十一年例、不止之、

九日庚寅季御讀經、

〔貞信公記抄〕七月九日、庚寅、御讀經始、

十二日、癸巳、依八省死穢、御讀經衆僧不令參內裏、於大極殿結願、此度南所行

也、

十六日酉諸國損田ノ率法ヲ定ム、

〔延喜式〕

二十六條家本

主稅式上

凡諸國申損田、縱國內田有一万町、出舉稻五十万束、遣使勘定損田千町、令申

延喜十一年七月四日 七日 九日 十六日

三三三

穢中二行
御讀經始
結願

未納者ハ
官符ニ依
リテ勘定
セシム

延喜十一年七月十七日 二十日 二十九日

三三四

雜稻未納五万束、已下自外、率此數爲定准、但其未納者、依官符勘定、

〔(要考) 此條者依延喜十一年七月十六日起請之官符所立也、兼亦載太政官式、〕

十七日、戊戌郡司召、

〔貞信公記抄〕七月十七日、郡司召、

二十日、辛丑藤原玄上二昇殿ヲ聽ス、

〔公卿補任〕延喜十九年 參議從四位上藤玄上、六十七月廿日如故昇殿、

二十九日、庚戌相撲召合、

〔日本紀略〕醍醐天皇 七月廿九日、庚戌、相撲召合、

卅日、辛亥、追相撲、

〔貞信公記抄〕七月廿九日、召合、有樂、

卅日、後覽、

八月十三日、相撲饗、

〔樗囊抄〕年中行事 廿九日召合、〔延喜〕同十一年

綾綺殿前、〔延喜〕同十一、七廿九合、

〔仁智要錄〕壹越調 河曲子、河或拍子十六、一說、柏子十二、類聚箏譜云、拍

追相撲

樂

饗

歌曲子ヲ
奏ス

藤原忠房
柏子ヲ改

舞ナシ

子十六、但延喜御時、除口四拍子、用十二拍子、依師說注之、或譜云、去延喜十一年相撲節、奏參音聲之時、故山城守藤原忠房朝臣改古手所撰也、無舞、

〔體源抄〕三末 歌曲子、新古不詳、中曲、无舞、拍子十六、又十二、反時末、四加三度、拍子、又歌曲子、瓊

延喜十一年相撲節、有勅、被棄四拍子、以其同之故也、雖然小部正清ハ尙用十六拍子云々、即寂勝寺供養日、十六拍子、此瓊字舞姬名也、只拍子アリ、

延喜十一年七月二十九日

三三五

延喜十一年八月二十八日

八月王子朔盡

二十八日卯僧綱ヲ任ズ、

〔僧綱補任〕〇二興福寺本

權律師玄照 八月廿八日任、天台宗、延曆寺、慈覺大師入室、三國氏、

大威儀師神豫 八月五日任、

〇神豫ヲ大威儀師ニ補スルコト、便宜合致ス、

九月大辛巳朔盡

七日亥民部少丞大藏常直、本任放還ノ責ヲ免ズ、

〔類聚符宣抄〕八任符事免本任放還事

民部少丞大藏常直

右大納言藤原卿宣、件常直宜免本任山城國放還之責者、

延喜十一年九月七日

大外記阿刀宿禰春正奉

九日丑重陽宴、是日、侍從十人ヲ補ス、

〔日本紀略〕醍醐天皇 九月九日、己丑、重陽宴、題云、霽色明遠空、

〔貞信公記抄〕 九月九日、有節、

〔西宮記〕九月九日宴 延喜十一、九、有宴、補侍從十人、了王卿著宜陽殿、有坏酒、召

侍從奏見參、無宴者上卿奏

延喜十一年九月九日、重陽宴也、無政、被補侍從十人云々、〇撰集祕記同シ

〔類聚句題抄〕 霽色明遠空

〔長谷雄〕 紀納言

當頭漸送紅輪遠、極眼初迎翠漢高、魚愛景沈應出浦、鶴耽天靜不歸臯、光臨及我難逃影、昭晰加人欲折毫、虹破暮山殘色斂、鴈過霜路旅行勞、

延喜十一年九月七日 九日

詩題

紀長谷雄ノ詩

延喜十一年九月十一日 十六日 十九日

善相公

三三八

碧落凄清陰靄盡，金商蕭爽曉天高。窓中指點鴻賓塞，雲外占看鶴反臯。排霧樹遙織似養，繞郊河遠少於毫。如潭豈有波濤起，導鏡終無拂拭勞。

統理平

察々卑聽呼早達，蒼々正色仰彌高。搖虛影接鴻飛處，碧落音通鶴唳臯。幾許群臣呈露膽，都盧万物照秋毫。應攜鳳掖斜陽近，不用龍沙遠眺勞。

十一日、卯伊勢例幣、

〔貞信公記抄〕九月十一日、依御物忌不行事、公卿於八省東廊行事、

〔西宮記〕五前田家本 十一日奉幣 天慶六年九月十日、上卿參陣、可有明日行幸之由奉仰、令仰諸衛、但延喜略中 十一年、上召仰諸衛、撰集秘記同シ

十六日、丙除日、

〔貞信公記抄〕九月十六日、除日、凶會、

〔古今和歌集目錄〕庶人阿保經覽 十一年九月十六日任主稅頭、

十九日、亥臨時奉幣、

〔貞信公記抄〕九月十九日、己亥、有臨時幣使、

二十一日、辛鷺ノ怪ニ依リ、律師玄照ヲシテ、豐樂院ニ於テ、熾盛光不斷法ヲ行ハシム、

〔日本紀略〕醍醐天皇九月廿一日、御修法、依大極殿鷺怪也、

〔扶桑略記〕醍醐天皇九月廿一日、辛丑、自今日、於豐樂院有御修法、七箇日、依大極殿鷺怪也、

〔明匠略傳〕日本玄照律師 十一年秋禁中頻有鷺怪、於豐樂殿、令修熾盛光不斷法、三日間、鷺怪已止、元亨釋書同シ

〔阿婆縛抄〕熾盛光法日記集一同傳云、延喜十一年秋、禁中頻有鷺怪、聖心不悅、爰有勅、於豐樂院令修熾盛光不斷法、三日間、鷺怪已上結願之後、召於御前、賜權律師法橋上人位、權中納言從三位藤原道明朝臣宣命、更有御宣、勅談良久、即內侍所例祿之上、重賜御衣一襲、兼賜度者廿一人云々、

二十四日、甲菊花宴、是日、大宰大貳藤原興範赴任ス、殿上ニ召シテ、餞ヲ給フ、

〔日本紀略〕醍醐天皇九月廿四日、菊花宴、

〔公卿補任〕四參議從四位上藤原興範、六十九九月廿四日正四下、今日召殿上

延喜十一年九月二十一日 二十四日

三三九

延喜十一年九月二十六日

給餞之次所敘○一代要記二

〔貞信公記抄〕九月廿三日、餞大貳

廿四日、大貳賜御酒、兼敘正下、

○興範ヲ大宰大貳ニ任ズルコト、四月二十八日ノ條ニ見ユ、

二十六日、丙午季御讀經、

〔日本紀略〕醍醐天皇九月廿六日、季御讀經、

忠平興範
ヲ餞ス
敘位

十月大
辛亥朔盡

一日、亥旬、

〔貞信公記抄〕十月一日、依御物忌不御南、

五日、乙弓場始、

〔貞信公記抄〕十月五日、内裏弓場始、

十日、庚申興福寺維摩會、

〔維摩會講師研學堅義次第〕探題律師增利イ十一年、辛未講師延年五十一、萬卅七、徹三論宗兼眞言宗、東大寺、

始メテ醒
醐門徒ヲ
置ク如
五獅子相
意ノ相傳
探題ノ始

長統氏、右京人、聖寶僧正入室、不成業、東南院根本○、皇或本云、師主任權僧正
時、○申慶賀之日、延徹爲凡僧、候僧正從僧、禪定法皇問給延徹、不任之、由即
不受、爰師勸當答云、我修學途三會已講、欲任僧綱也、始置醍以門徒、如法皇、仍
皇舉藤氏長者、蒙講師宣旨、兼雖無階業、奉仕講僧也、探題律師增利、探題宣旨、探題日、探題始、探題蒙、探題之、探題探、探題外、探題現、探題法、探題研
擊、諸寺聽衆不疑義也、互相表白、云答之、講師持、探題律師增利、探題宣旨、探題日、探題始、探題蒙、探題之、探題探、探題外、探題現、探題法、探題研
學清慶年

〔三會定一記〕一、延喜十一年、去年十月、宣講師延五十一徹東大寺、堅義、清慶、次、惠能

探題律師增利、十月始蒙宣旨、十六年奉仕、

〔釋家初例抄〕下、非興福寺別當蒙探題宣旨例

權律師增利、延木六年任、同十一年蒙探題宣旨、探題作法此人初之、○日傳本

延喜十一年十月一日 五日 十日

探題作法
ヲ始メ

延喜十一年十月二十二日 二十八日

三四二

要文抄異
事無シ

○聖寶五獅子如意ヲ延傲ニ相傳スルコト、九年七月六日ノ條ニ引ク
所ノ尊師御一期日記ニ見ユ、

二十二日申東宮始メテ御註孝經ヲ讀ミ給フ、

〔日本紀略〕醍醐天皇十月廿二日庚寅皇太子始讀御註孝經、

〔大鏡裏書〕崇徳天皇文彥太子事

延喜同十一年十月廿二日始讀御註孝經、年九

二十八日戌内裏觸穢、

〔貞信公記抄〕十月廿八日改葬所人入内藏寮々人今朝參入内裏仍内裏力兩
處神事付所司可行云々、

十一月大辛巳朔

一日辛巳忌火御膳ヲ供ス、

〔西宮記〕六月司供忌火御飯一日内膳延喜同十一年十一月一日略○中有觸穢然而供忌火

御膳如常云々御記

九日己勅シテ、毎年綿二千屯ヲ宇多院ニ進メシム、

〔符宣抄〕別本

左大辨藤原朝臣清貫傳宣、大納言藤原朝臣忠平宣、奉勅毎年綿二千屯、可充
進宇多院、但其官符、十月五日、宜下大藏省、立爲恆例者、

延喜十一年十一月九日

右大史

□卷

十一日卯新嘗祭、

〔九條年中行事〕十一月中卯日新嘗會事 還御之間、近衛大忌陣、或時相副於小忌

陣祇候、是已違式文也、被糺仰之由、見延喜十一年十二月十二日略○中御日記

云々、

十五日乙未女御藤原穩子參内アラセラル、

〔貞信公記抄〕十一月壬午五日御息所入内、

延喜十一年十一月一日 九日 十一日 十五日

三四三

觸穢アリ

近衛大忌
陣ノ違式

二十八日^申、東宮及^ビ將順、將觀、將保、將明ノ四親王ノ御名ヲ改メ、皇子式明、有明等ヲ親王ト爲シ、皇女繁子、雅子、普子等ヲ内親王ト爲ス、

〔日本紀略〕^{醍醐天皇}十一月廿八日、皇太子崇象親王改名保明、又第一將順親

王改名克明、第三將觀親王改名代明、第四將保爲重明、第五將明爲常明、以第六式明、第七有明等爲親王、又以皇女繁子、^{○繁子、一代要記、皇代記、皇胤系圖、本朝皇胤、紹運錄、並ニ敏子ニ作ル}雅子、普子等爲内親王、

〔符宣抄〕^{別本} 皇太子事 付改御名事

太政官符、神祇、中務、式部、民部、刑部、大藏、宮内、彈正、左右京、春宮、修理、勘解由、齋院等省臺職坊使等、

改定皇太子御名事

右^毛大臣宣奉勅、宜改崇象、定保明者、諸司承知符到奉行、

左大辨藤原朝臣^{前貫}

左大史布瑠宿禰

延喜十一年十二月廿八日^(一カ)

〔一代要記〕^{醍醐天皇} 式明親王 三品、中務卿、母同常明、延喜十一年十一月

月廿一日爲親王、年五歲、

有明親王 三品、兵部卿、母同式明、延喜十一年十一月廿一日爲親王、年二歲、

〔一代要記〕^{醍醐天皇} 敏子内親王 無品、延喜十一年十一月八日爲内親

王、年六歲、

雅子内親王 延喜十一年十一月廿八日爲内親王、年三歲、

普子内親王 延喜十年十一月廿八日^(一カ)内親王、年二歲、

延喜十一年十二月一日 十一日 十六日 十八日 十九日

十二月 辛亥朔

一日、辛亥、日食、

廢務

〔日本紀略〕醍醐天皇 十二月十一日、辛亥、日蝕、廢務、扶桑略記

十一日、西神今食、

神嘉殿出

〔日本紀略〕醍醐天皇 十二月十一日、辛酉、神今食、天皇御中院、

〔貞信公記抄〕 十二月十一日、候大齋、

〔西宮記〕神今食 散齋日在穢內行神事例

御物忌

延喜 同十一年十二月十一日、昨今日物忌也、戊一刻、御中院行神事云々、今夜參議

二人、供奉小忌云々、

十六日、丙寅、

〔北山抄〕二年 年中要抄下

六月

大忌近衛陣、還御時供奉例、延喜十一年

紫宸殿出

〔貞信公記抄〕 十二月十六日、上御南殿、

十八日、辰大學寮、晉書竟宴ヲ行フ、

〔日本紀略〕醍醐天皇 十二月十八日、戊辰、大學寮行晉書竟宴、

十九日、巳御佛名、

結願

〔貞信公記抄〕 十二月十九日、丙佛名、

廿一日、參御佛名、結願之後退出、

二十日、庚午山城、大和、河内、和泉、攝津、近江等六國ノ日次御贄ヲ定ム、

〔西宮記〕

十前臨時丁

侍中事

又同例子御所云、

延木十一年十二月廿日

官符始定六箇國日次御贄、山城國、鳩、鶉、鴨、小鳥、鯉、鮒、鰕、十一日、七日、十三日、大

和國、鳩、鶉、鴨、鮎、二日、八日、十四日、河内國、鳩、鶉、鴨、高戶、小鳥、卵、鮒、鱸、三日、

日、十五日、廿一日、和泉國、鯛、鱈、世比、擁劔、烏賊、蛤、四日、十日、十六日、攝津國、貝、蚶、擁劔

烏賊、鯉、卵、子、鮒、鱸、干鯛、鱈、世比、蝦、蛤、五日、十一日、十七日、近江國、鹿、安、四枚、猪、安、四

枚、已上二種、鳩、鶉、鴨、高戶、小鳥、鯉、鮒、阿米、鮒、鰕、六日、十二日、十八日、者、今案、件等

於內膳司、之、官、人、以、解、文、覽、藏、人、隨、其、處、分、進、進、物、所、御、廚、子、所、等、○、侍、中、群、要、同、シ、

二十二日、壬申東宮御佛名、

〔貞信公記抄〕保明親王 十二月廿二日、宮御佛名始、仍參、

二十六日、丙子荷前、

〔貞信公記抄〕 十二月廿六日、參山階山陵、

二十八日、戊寅參議源當時ヲ檢非違使別當卜爲ス、

忠平山階
山陵三使

延喜十一年十二月二十日 二十二日 二十六日 二十八日

延喜十一年十二月二十九日

三四八

忠平ノ替

〔公卿補任〕

四

大納言從

三位藤忠平、十二

月廿八日止別當

〔按非攝使〕

○攝關傳

一

要記同

參 議從四位上源當時

四 十二月廿八日爲使別當

○二 中歷

異事ナシ

、

二十九日_卯追儺、

雨儀

〔貞信公記抄〕

十二月廿九日、雨儀、親王已下座、設承明門東廊、但開門之後如

晴儀、

是歲、少内記紀貫之、東宮御屏風ノ和歌ヲ詠進ス、

〔紀貫之集〕

三

延喜十一年、東宮御屏風歌

右近衛中將の君の被傳仰

〔藤原定方〕

あれひきに引つれてこそ千早ふるかもの河なみ立わたりけれ
時鳥なくなる聲をさなへとるてまうちやすみあはれこそ聞
たきつせの物にそ有ける白玉はみるたひことにみぬ時そなき
夜に隠れきつるかひなく紅葉はも月もあかくそ照まさりける

延喜十一年是歲

三四九

年末雜載

神社

〔祠官系圖〕 別雷神官祠官十六流

貞基彌宜

忠實彌宜 延喜十一年補

佛寺

〔彌勒寺鐘銘〕田村延光寺所藏 彌勒寺鐘銘

延喜十一年歲辛未正月九日甲子鑄彌勒寺鐘

〔土佐國古鐘類聚〕自延喜至慶長

○鐘銘略ス、
上ニ掲ケ

右幡多郡山田村寺山延光寺半鐘、按彌勒寺在山城國葛野郡寺今廢、

〔正倉院文書〕東南院文書 壹櫃第三卷

太政官牒、東大寺

應以權上座威儀師傳燈大法師位離世補正員事

右得彼寺牒、謹案太政官去延喜十一年十月廿六日符、以件威儀師離世

上賀茂社
彌宜忠實
補任

彌勒寺ノ
鐘ヲ鑄ル

東大寺權
上座離世
ノ補任

極樂寺會
利會
同萬燈會
禪林寺所
藏ノ兩部
別錄
胎藏界

任權上座、令濟雜務、但正員上座傳燈大法師位慶贊秩滿之後、不補他僧、便以
權任將爲正員者、○中

延喜十三年二月廿二日

〔真信公記抄〕 三月廿九日癸丑、參極樂寺、由舍利會也、

十月卅日、極樂寺万燈會、有小樂、

〔兩部別錄〕○水尾禪林寺本

胎藏界

大日經義釋一部十卷

世間成就品疏一卷

息障品疏一卷

釋文次第一卷

略釋毗盧遮那經中義一卷

毗盧遮那經疏一部十四卷

阿闍梨立要義一卷

毗盧遮那經義釋序一卷

延喜十一年雜載

- 蓮花胎藏菩提幢標熾（輪）普通真言廣大成就瑜伽一部三卷
- 蓮花胎藏悲生曼荼羅廣大成就儀軌二卷
- 蓮花胎藏悲生曼荼羅廣大成就儀軌三卷
- 大毗盧遮那成佛神變加持經蓮花胎藏悲生曼荼羅廣大成就儀軌一帖上
- 蓮華胎藏悲生曼荼羅廣大成就儀軌一部三卷
- 六月持明禁戒念誦儀軌一帖復大日經中真言
- 大日經持誦次第不同六卷
- 胎藏部略次第一卷
- 胎藏次第一帖
- 胎藏次第一帖
- 胎藏次第二帖
- 胎藏次第一帖
- 胎藏部略次第一卷
- 大悲胎藏祕密阿闍梨持念要集二帖
- 持念要集一帖復解穢要拾法

灌頂部

灌頂部

- 胎藏記別出一卷
- 胎藏要法觀行要略抄一卷
- 眼囉明文一紙
- 胎藏大次第三帖
- 胎藏次第一卷
- 藏契私記一卷
- 大毗盧遮那佛說略要念誦經一卷
- 嘉會壇中灌頂行法一部六卷
- 七日夜記一卷
- 阿闍梨所傳曼荼羅圖一卷
- 灌頂夜神供作法一卷
- 胎藏界受明灌頂作法次第一卷
- 三昧耶戒文一帖
- 傳三昧耶戒私記一卷

延喜十一年雜載

胎藏界入曼荼羅受并戒行儀一卷

大悲胎藏入壇受并戒行儀一卷

結緣灌頂次第一卷

兩部結緣灌頂次第一卷

胎藏曼荼羅尊住名號種子三昧耶手印真言一帖

結緣灌頂行事一卷

胎藏界灌頂密號一帖

大悲胎藏諸尊種子三昧印明一帖

灌頂所加持真言一卷

胎藏灌頂護摩略頌一卷

佛部

佛部

大悲胎藏祕密曼荼羅佛部持誦次第法一帖

持誦次第私記三卷

隨行私記一帖

持念要集一帖

五支念誦梵字一卷

毗盧遮那五字真言修習儀軌一卷

大碎椎真言梵漢雙字本一卷

七俱胝佛母准泥大明陀羅尼念誦法門譯一帖

大佛頂修行次第一卷

大佛頂尊勝陀羅尼經驗義一卷

尊勝珠林序一卷

佛頂尊勝陀羅尼一卷

佛頂尊勝陀羅尼二卷

佛頂尊勝陀羅尼注義二卷

加句靈驗佛頂尊勝陀羅尼一卷 并記

梵漢對譯大佛頂陀羅尼一帖

熾盛法(平脫力)一帖

廣攝不動明王祕要訣四卷

熾盛光除灾教令輪一帖

延喜十一年雜載

延喜十一年雜載

常住金剛略次第一卷

不動明王立印義軌修行次第第一卷

不動忿怒明王法次第第二帖

不動法中雜真言一帖

不動尊鎮宅真言一卷

次第印私記一卷

大悲胎藏祕密曼荼羅聖不動明王普通念誦次第法一卷

大悲胎藏祕密曼荼羅勝三世明王持誦次第法一卷

蓮花部

阿嚕力迦次第一卷

大悲胎藏祕密曼荼羅蓮花部持誦次第法一帖

蓮花胎藏悲生曼荼羅千手千眼自在菩薩供養次第法一卷

大聖千手千眼觀自在菩薩持念次第第一卷

不空羂索神變真言經中屬胎藏法要決一卷

文殊師利菩薩根本大教王金翅鳥王品一卷

金剛部

摩利支菩薩毗念誦法一卷

金剛部

大悲胎藏祕密曼荼羅金剛部持誦次第法一帖

大悲胎藏悲生曼荼羅第三種釋迦眷屬及諸天印明種子梵號名位不同一帖

諸天部

十二天次第一帖

大聖天次第一帖

迦樓羅次第一卷

金剛界別錄

通大法部

金剛儀界軌一帖

金剛薩埵百八讚注譯

教王經疏一部七卷

卅七尊種々變子相

延喜十一年雜載

金剛頂瑜伽中略出念誦法一帖

八大明王法一卷

金剛瑜伽蓮花部心念誦儀中略集關鐸妙印一本

大妙金剛大甘露軍拏利焰鬘熾盛佛頂經一卷

熾盛佛頂威德光明真言儀軌一卷

金剛頂經略抄一卷

金剛界次第法一卷

金剛瑜伽要略念誦儀軌一卷

金剛界私記三卷 金剛界記一卷、譯紙

金剛界念誦次第 金剛界次第一卷、第三卷、

四種念誦一卷

金剛界密號一卷 金剛灌頂部中略要卅七尊漫茶羅王一卷

三昧耶戒一卷

寂上乘授菩提心戒及心地祕決一卷

阿闍梨教授弟子儀軌一卷

灌頂陀羅尼一卷

授三昧耶佛戒次第法一卷

結緣灌頂次第一卷

阿闍利大曼荼羅灌頂儀軌一卷 歸命文一卷

金剛受明灌頂次第一卷 金剛界入曼荼羅受三昧耶戒儀一卷

金剛頂瑜伽護摩儀軌一卷

護摩次第一卷

護摩次第一卷

護摩次第一卷

內護摩觀一卷

內護摩法一卷

金剛頂瑜伽護摩儀軌次第第一卷

護摩儀軌中真言梵字一帖

三摩地次第第一卷

三摩地略次第第一卷

延喜十一年雜載

延喜十一年雜載

三摩地次第一卷

毗盧遮那三摩地法儀軌次第一卷

安怛陀那儀則一卷

佛母曼荼羅念誦要法集一帖

熾盛佛頂威德光明真言儀軌一卷

大妙金剛大甘露軍拏利焰鬘熾盛佛頂經一卷

三摩地次第一帖

吽字一字真言

普賢讚具足本一卷

虛空藏次第一卷 虛空藏次第一卷

廣攝虛空藏菩薩行要決一部三卷

吉祥金剛念誦次第一卷

梵字千手儀軌中真言一卷

千手念誦次第二卷 同次第一卷

如意輪念誦次第一帖 如意輪次第二卷

蘇悉地部

大法部

蘇悉地部

大法部

蘇悉地羯羅供養法二卷 一部

蘇悉地祕記一卷 五大院

清淨金剛蘇悉地疏科文一卷

蘇悉地對受記二卷

同法私記一卷 白河

同法私記一卷 覺大師記內題之妙成就記

同法手契圖一卷

四種壇法一卷

蘇悉地重立門儀軌一卷

灌頂部

金剛大道場經大明藏分授灌頂印法一卷

建立曼荼羅次第 七日作法

佛部

延喜十一年雜載

延喜十一年雜載

大佛頂別行法一卷

大佛頂經放光悉路多跋怛囉尼成就方法決一卷

大佛頂別行法一卷 大佛頂修行法記一帖

藥師如來頂上光明梵字決并衆本不同一卷

一字大明王悉地成就儀軌一卷

熾盛光次第一卷 熾盛光要法一帖
熾盛光佛頂一帖

蓮花部

馬頭觀世音陀羅尼法一卷

千手千眼觀自在菩薩真言二本 複一卷

如意輪次第一卷 照本

十一面次第一卷

同次第一卷

金剛部

阿吒薄俱經一部三卷 複

阿吒薄俱修行儀軌一部一帖 複三卷

天部

同經一部三卷

阿吒薄拘鬼神大將上佛經一卷

大猛將屈吒法一帖

聖炎慢德迦威怒王念誦次第一卷

同法次第印一卷

天部

五星真言一枚

大自在天權現歡喜天供法一卷 僧慎爾邪法一帖

悉曇部

文字語言一卷

梵漢對注譯般若心經一卷

中院悉曇勘定記一卷

五天字跡兼五天音及卅九字^(譯)堵陀羅尼都一帖

阿彌陀經梵本一卷

廿八宿真言一枚

同法次第一卷 五大院

大般涅槃經悉曇章中國品一卷

梵語五部一卷

悉曇一帖

對譯廣本般若心經一帖

目錄部

目錄部

延喜十一年雜載

諸義門部

高野僧正大和尚錄一卷
 慈覺大師錄一卷
 珍和尚錄一卷
 五大院錄一卷
 白川寺錄一卷
 天台法花圓宗錄一卷
 五大院撰集請阿闍梨一卷
 所求供文目錄三卷

雜記印信

金剛大道場經大明藏分通別行法要記一卷
 念珠經問答一卷
 三十條問(答略)一卷
 雜記印信
 真言付法傳一帖二卷

道具

道具

合
 金銅五古杵二枚 一長六寸三分 一長六寸一分
 同五古鈴二口 一長六寸五分 一長五寸五分
 同三古杵一枚 長六寸
 同三古鈴一口 長六寸二分
 同獨古杵二枚 一長六寸七分 一長六寸七分
 同獨古鈴一口 長六寸五分

佛器

一佛器

同羯磨杵四枚 徑五寸
 同金剛槩四枚 長四寸五分
 同輪二枚 一徑五寸七分 一徑三寸七分
 純金鐐一枚 重二兩三朱
 鏡一面 徑五寸
 蓋一條 紫色 方一尺三寸
 螺一枚
 帶五條 一條長四尺八寸 一條長四尺三寸 一條長四尺三寸 一條長四尺三寸 一條長四尺三寸
 絳帛一條 長五尺二寸
 五色糸一條 長二丈九尺一寸
 已上盛黑沫草書莒一合
 納御袈裟一條 加黑紫一顆倭綾橫被裏赤紫 遠江綾犬足
 納銀蒔繪木莒一合 在夾纈縫立
 金銅鏤如意一柄
 右經藏釋
 佛器
 金銅闕伽器八口 一口損口徑三寸七分 同盤八口 口徑三寸七分
 同塗香器八口 口徑三寸 同盤八口 口徑三寸二分
 同花盤八口 一口徑四寸三分 一口損四寸三分 同花盤二口 口徑五寸五分
 同鉢八口 口徑四寸三分 同鉢八口 口徑四寸三分 同生銅花瓶四口 高二寸 一口損

延喜十一年雜載

白瓷甌子八口一口五口小

尾張瓷薰爐四口一口无蓋

同角盤十口

三六六

已上盛檜木櫃一合

一堂裝嚴具

白幡十旒各長七尺 盛檜木小櫃

右法花堂料在施入文

屏風三帖二帖布五尺大破 一帖四尺

釜二口納二斗小破 鐵臼一口加同杵一枚

唐斤一具 細貫東薙拾枚 赤沫帳一具

右房具料

厨子五基三基黑沫三尺在金物 一基白木三尺在榻子 一基赤沫三尺

右件法文實錄如件

延喜十一年十一月二日

權律師神日

預法師晴祐

法師寂照

神日

大原町他
丸寺領チ
金剛峯寺
ニ寄進ス

〔高野春秋〕

三

延喜十一年月日、以神野真國二鄉、被寄進奧院常燈料所、是

大原父子之信施也古記云、此兩鄉者、仁和中、大原屢丸開作之、而後子息、閑他丸、長相傳之、了、今施入奧院燈油料

〔紀伊續風土記〕

高野山部七 所領二千石

延喜十一年雜載

三六七

法師延道

門徒

法師

法師

法師

法師泰信

法師喜胤

法師延行

法師平恆

法師平仁

法師

法師

其庄園寄附の事、野山興廢記に延喜十一年、以神野真國郷寄進金剛峯寺、勤仕常燈不斷役といふ、此莊園の租税をもて、廟前の燈炬をも挑けたらん、舊記の考證なければ、後世此二郷與院領となれば、古昔も其縁由ありしと思はる、上略

諸家、

〔真信公記抄〕正月廿一日、丙午、參向宇治、

十二月十三日、癸亥、凶會、遷五條院、

〔真信公記抄〕正月廿七日、壬子、法始、

十月十七日、丁卯、修法始、

〔真信公記抄〕九月廿九日、己酉、服紅雪、閉日、

十月十一日、辛酉、服鍾乳丸、

十一月九日、丙申、從容丸、

〔真信公記抄〕十月十四日、依病請假、三ケ日、

廿九日、依犬死穢、不參陣中、是依内仰、

生死、

忠平宇治ニ赴ク

五條院ニ遷ル

忠平佛事ヲ修ス

忠平服藥

忠平病ニ依リテ假ヲ請フ
忠平觸穢

〔祠官系圖〕

別雷神官祠官十
門麿禰宜

真基禰宜元慶八年四月三日、敍外從五位下、元正七年仁和二年丙午、補禰宜、寬平元年、被始置臨時祭、延喜十一年辛未卒、

公驗、

〔根岸文書〕

充行家地公驗事 案文

合肆枚一枚本券文一枚行文 地員貳段貳佰步、

右大和國葛下郡廿二條三里十八坪一段、東南角、

右故伯父平田宿禰全妹丸得分地也、而賜福留子已了、此坪三男處分了、

同郡廿四條三里廿五坪一段 廿六坪二百步、

右故親父賜地公驗也、

右件家地公驗、依有教、甥同、姓高雄、永年度行如件、

延喜十一年三月廿三日

姑平田宿禰福留子

件公驗度給見甥平田常範

福留子居住紀伊國伊都郡判

平田安範

延喜十一年雜載

上賀茂社
禰宜賀茂
真基卒ス

大和葛下
郡家地公
驗

郡老

檢校正六位上文伊美吉今雄

所由文新雄

郡老□六位下六人部連

文興國

郡老大領外從八位上文伊美吉

文全邦

擬大領從七位上文伊美吉

主帳外大初位且來直

擬大領從八位上六人部連

主□從八位上六人部連忠雄

從八位上文伊美吉

〔藥師院文書〕

○伯爵田中光顯氏所藏

謹言

請蒙刀禰證署并郡

聖田等事

家地參段、新開爲田

聖田肆段佰步、

並在添上郡京東五條五上春日里五坪并四春日里卅二坪、

右檢案内、件聖田等、故專寺造司專當命順大法師、以去貞觀十四年、從本主石川朝臣瀧雄之手所買得也、但彼大法師、爲恐格制實行之名立券也、□□件命順賜處分於弟子僧恩正、恩正讓與於□□與於慶贊、而元興

大和添上郡家地公驗

條司刀禰等ノ日記

寺僧玄阿大法師、稱已墾田、以妨領之、仍頃年以彼公驗、經愁刀禰并郡衙、隨即彼此公驗可勘校之狀、下符條司、隨即公驗可相向之狀、牒送玄阿大法師、而件玄阿大法師、左右遁避、不向公驗、暗領地頭、其由在條司并刀禰日記□□望也、蒙明裁、任於公驗、將被與判、仍副調度□□

延喜十一年四月十一日

東大寺上座大法師慶贊

條使

件依慶讚大法師御愁、郡以去延喜六年、任彼此公驗、可件坪々破定之由、條司并刀禰等所被、下帖也、而條使刀禰等障公務、經年不辨、而依彼大法師□□月十九日、爲破定件□□

(紙目裏印アリ)

許、可相逢公驗之由、申送、而慶讚大法師者、公驗持向也、彼玄阿大法師者、公驗无相向、又以今年三月十六日、又可公驗向之由、重申送、而猶不出、即玄阿大法師云々、已附國郡帳、元、與寺田五段百步、是尤公驗□□條司刀禰云、何乍□□圖帳、可無本公驗云々、雖然、聿无相逢、而彼慶讚大法師所出公驗、國郡判明白也、仍加刀禰署、

刀禰

縣犬養

評淨常

和邇部福富

新田部廣常

和邇部貞心

櫟井石雄

丈部有岑

伊勢安伊

榎井有數

秦古吉

國老

國目代

郡老

〔件カ〕依刀禰等證驗加署印、

國老紀甲雄

國目代高橋興良

古曰佐良雄

郡老大宅金方

少領道守是則踏〇本書添上郡印ナラズ、類數詳ナラズ、

擬主政大宅眞〔件カ〕

擬主帳秦福利

雜、

孔雀卵ヲ産ス

〔日本紀略〕

醍醐天皇

三月廿六日孔雀雌産卵、

〔扶桑略記〕

醍醐天皇

卵八員又去年夏時同産三卵然而未至爲雛此鳥無雄以何産哉、

延喜十二年壬申

正月庚辰朔盡

一日庚辰節會雨濕ニ依リテ朝賀ヲ停ム、

〔日本紀略〕醍醐天皇 正月一日庚辰依雨濕無朝賀御南殿宴會、

〔貞信公記抄〕 正月一日依御物忌廢朝拜但御南殿有宴會、

〔西宮記〕正月上 延喜十二年正月一日出南殿掌侍召大臣右大臣至左仗

立揖還上殿依雨濕儀所行也故左大臣不到仗頭

同年殿上人著幄座事、

二日辛巳東宮大饗、

〔日本紀略〕醍醐天皇 正月二日辛巳東宮大饗、

三日壬午御體御卜ニ依リテ朝覲行幸ヲ停メ給フ、

〔貞信公記抄〕 正月三日依御體御卜停止行幸、

〔日本紀略〕醍醐天皇 正月三日壬午天皇幸仁和寺拜賀法皇、

○本書貞信公記抄ト合ハズ姑ラク疑ヲ存ス、

四日癸未東宮及ビ諸親王參觀アラセラル、

延喜十二年正月一日 二日 三日 四日

紫宸殿出御

雨儀

延喜十二年正月五日 七日

〔日本紀略〕醍醐 正月四日、癸未、皇太子諸親王等參觀、

〔貞信公記抄〕 正月四日、東宮朝觀、

克明代明
兩親王拜

〔西宮記〕正月 延喜十二年正月四日、太子參入云々、暫克明代明

皇太子御
生母ヲ拜
セラル
簾中拜

親王庭中拜舞、又召之云々、太子親王給酒肴、親王等拜舞時落一拜、仍召親王
別當恆佐俊蔭給罰酒云々、召大納言藤原朝臣仰、令皇太子拜女御藤原朝臣、
年來事謬不得此事、仍仰令行只簾中拜、撰集秘

五日、申右大臣光、大饗ヲ行フ、

〔日本紀略〕醍醐 正月五日、大臣大饗、

〔貞信公記抄〕 正月五日、右大臣大饗、

七日、丙節會、敘位、

〔日本紀略〕醍醐 正月六日、敘位議、

〔貞信公記抄〕 正月六日、敘位議、

七日、節會如例、

是忠親王
穢ニ依リ
テ王氏爵
ヲ定メズ

〔西宮記〕五月 延喜十二年正月六日、議敘位、王氏爵式部卿親王依
穢不定申、仍停止、一世源氏當君三位者有疑、即勘右大臣源多、仁明天皇第一

治國ノ功

入内

戸野清亮
ノ敘爵

皇子也、

〔公卿補任〕四 參議從四位下藤清貫、四 正月七日從四位上、

〔公卿補任〕四 延喜十五年 參議從四位下藤原恒佐、卅六 同十二正七從四下、

任○職事補
同シ、

〔公卿補任〕四 延長五年 參議從四位上橘公賴、五十 同十二正七從五上、備前

〔公卿補任〕五 天曆元年 參議從四位上源等、六十 十二年正七從五上、治國

〔外記補任〕二 大外記從五位下菅野利蔭 正七敘、

〔古今和歌集目錄〕庶人 阿保經覽 十二年正月七日入内、

〔敘位除目執筆抄〕 延喜十二年正六敘位、執事、

○戸野清亮ノ敘爵、便宜左ニ附載ス、

〔伏見宮御記錄〕新寫九 紀家集裏書

式部省 請預榮爵大 戸野朝臣清

身勞十七

六箇年□中宮少屬

延喜十二年正月七日

延喜十二年正月八日 十一日 十三日 十五日

三七八

十一年見任

〔清亮奉公年久忘私〕、〔謹〕、八年間、皆關榮爵、清亮、齡過知命、〔〕
〔循先跡、將扇舊風、仍錄〕狀、〔〕、

延喜十二年

八日、御齋會、

〔西宮記〕 ○恒例一、正月除日、延喜十二正十四、除目間有内論議、

〔貞信公記抄〕 正月十四日、參八省、次參入大内、衆僧、〔義如常〕、

○御齋會當日ノ記事ナケレドモ、本書ニ依リテ、式日ニ掲グ、

十一日、地震、

〔扶桑略記〕 二月十三、裏書、正月十一日、庚寅地震、

十三日、内裏觸穢、

〔扶桑略記〕 二月四日、癸丑、去月十三日、觸死穢人入東宮、

又參内、

○穢ニ依リテ、來月ノ諸祭ヲ止ムルコト、二十五日ノ條ニ見ユ、

十五日、除日、

内論義

〔公卿補任〕 延喜十三年 參議從四位下橋澄清、同十二正十五右大辨、

〔公卿補任〕 延喜十五年 參議從四位下藤原恒佐、同十二正十五日兼

伊與權守、

〔公卿補任〕 延喜十七年 參議從四位上良峯衆樹、同十二正十五兼備

前守、

〔公卿補任〕 延喜十七年 參議從四位上橋公賴、同十二正十五日權右少

辨、

〔公卿補任〕 天曆元年 參議從四位上源等、十二年正十五日丹波守、

〔外記補任〕 二

大外記大藏良實 正十五任、兼算博士、

少外記伴 久永 正十五任、勘解由判官、進士、卅四、

〔古今和歌集目錄〕 酒井人真 十二年正月十五日轉左大史、

〔伏見宮御記錄〕 散位從五位下高階真人惟明、誠惶誠恐謹言、

請被特蒙天恩、預官斑之狀、

延喜十二年正月十五日

三七九

安藝權守
高階惟明
ノ解任

除目議始

豐樂殿出
御

延喜十二年正月十六日 十七日

三八〇

右 惟明、去延喜十二年正月十一日任安藝（權守）守、同十日得替解任、幸脫拘累、（中）

延喜十七年

〔貞信公記抄〕正月十二日、除目議始、

〔敍位除目執筆抄〕延喜十二年正月十二日縣召、十五入眼、執筆、右大臣已

十六日、乙未節會、

〔貞信公記抄〕正月十六日、有障不參、

十七日、丙申射禮、

〔日本紀略〕醍醐天皇正月十七日、丙申、天皇幸豐樂院大射、

〔貞信公記抄〕正月十七日、上御豐樂殿觀射、

主税頭從五位下阿保經覽卒ス、

〔古今和歌集目錄〕庶人阿保經覽

寬平五年七月廿三日任主計權少屬、十年二月廿三日任民部錄、昌泰二年正

月十一日任右少史、三年五月十五日兼等博士、延喜元年三月十五日轉左少

史、三年正月十一日任右大史、五年正月十一日轉左大史、七年正月七日外從

五位下、二月廿九日遷主計助、十一年九月十六日任主税頭、十二年正月七日
入内、十七日卒、

〔二中歷〕二諸司歷 二寮頭 阿保經覽 稅 （延喜） 同十四

〔小槻系圖〕

今雄

經覽

〔小槻家譜〕阿保經覽、今雄男、從五位下、左大史、主計頭、主税頭、算博士、延喜

十七年月日卒、

〔勅撰作者部類〕自帝王至庶人之部 經覽 五位、主税頭、阿保、至延喜十一年、 古今集

物名 新拾遺集 神、

〔日本紀竟宴和歌〕延喜六年 得思兼神

左大史正六位上兼行算博士阿保朝臣經覽

於蒙飛加禰多波賀利許度乎勢佐利勢波安萬能伊波度波飛羅氣佐良萬事

〔古今和歌集〕物名 からさき 阿保つねみ

かの方にいつからさきに渡りけむ波路は跡も残らさりけり

延喜十二年正月十七日

三八一

世系

改姓
歌什

和歌

自署

任實

〔正倉院文書〕

一 東南院文書 櫃第四卷

昌泰二年三月廿八日太政官牒

〔參考〕

十八日、丁酉賭弓、

〔日本紀略〕

天皇

正月十八日、丁酉、賭射、

〔貞信公記抄〕

正月十八日、右勝三度、惣四度畢、

二十日、左近衛少將藤原恆佐ヲ藏人頭ニ補ス、

〔職事補任〕

醍醐天皇

左近少將從四位下藤原恆佐

延喜十二年正月廿日

補、○公卿補任同シ

二十一日、庚子、內宴、

〔日本紀略〕

天皇

正月廿一日、庚子、內宴、題云、雪盡草芽生、以萌於仁壽殿被

行之、

〔貞信公記抄〕

正月廿一日、內宴、

〔西宮記〕

○恒例一家正月、內宴

同十二年正月廿一、一獻給羹、女藏人公卿下座、

詩題

淳茂詠詩
依リテ
敘筒セラ

其詩句

跪受用內膳汁、片イワシ、○下文汁

〔北山抄〕

三 拾遺雜抄上

同十二年、申刻夕陪膳更衣代出陪之、讀詩畢、授

式部丞淳茂從五位下、令恒佐唱、淳茂候階下、稱唯拜舞、○撰集秘記同シ

〔江談抄〕

四

河畔青袍雖可愛、小臣衣上太無心、正月漏敘位之年、內宴、雪盡草芽生、淳茂

依此句敘位、臨時

傳燈大律師智愷ヲ東大寺別當ニ補ス、

〔正倉院文書〕

一 東南院文書 櫃第二卷

太政官牒、東大寺

傳燈大律師位智愷、年六十八、花嚴宗

右從三位守大納言兼右近衛大將行春宮大夫藤原朝臣忠平宣奉勅、件智愷

宜補彼寺別當、延惟辭退之替者、寺宜承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、

延喜十二年正月廿一日

左大史正六位上物部宿禰自署下同シ

從五位上守右少辨藤原朝臣○本書太政官印

奉行 以二月三日、白堂了、

延喜十二年正月二十一日

延惟ノ替

延喜十二年正月二十五日 二十七日

別當

都維那

三八四

〔東大寺別當次第〕

廿八

傳燈大法師智鑑已講 延喜十二年正月廿一日符年八

藤五十一、花嚴宗、本寺、道雄僧都、資、右京人、內藏氏、○東寺文書所收ノ別當次第異事ナシ、

○智愷重任ノコト、十六年二月二十八日ノ條ニ見ユ、

二十五日辰穢ニ依リテ、來月ノ諸祭ヲ停ム、

〔日本紀略〕醍醐天皇 正月廿五日、宣旨、依穢停來月諸祭、

○内裏觸穢ノコト、十三日ノ條ニ見ユ、

二十七日丙外記政始、是日、源是茂ヲ侍從ニ補ス、

〔貞信公記抄〕 正月廿七日、外記政始、

〔公卿補任〕五 承平四年 參議正四位下源是茂、五十一、十二年正廿七侍從、

二月 庚戌朔

二日辛、仁和寺ニ行幸アラセラル、

〔日本紀略〕醍醐天皇 二月二日、辛亥、天皇幸仁和寺、

〔貞信公記抄〕 二月二日、行幸仁和寺、賜祿一如承和七年例、但院判官代及五位賜衾、

院判官代等ニ衾ヲ賜フ

〔西宮記〕臨時社行幸 延喜十二年二月二日、行幸仁和寺、

四日癸丑穢ニ依リテ、祈年祭ヲ延引ス、尋デ、之ヲ追行ス、

〔日本紀略〕醍醐天皇 二月四日、祈年祭延引、

十九日、祈年祭、

〔西宮記〕祈年祭 延喜十二二四、祈年祭依穢延引、十九日被行云々、○臨時社行幸條

〔扶桑略記〕醍醐天皇上 二月四日、癸丑、祈年祭延引、去月十三日、觸死穢人

入東宮又參内（内裏）

〔年中行事抄〕二月 祈年祭事 延喜十二年、依内裏穢止祭、

八日、穢ニ依リテ、釋奠ヲ延引ス、

延喜十二年二月二日 四日 八日

三八五

〔日本紀略〕醍醐天皇 二月八日、釋奠延引、

〔小右記〕 萬壽二年八月十四日、癸亥、大外記賴隆云、○中延長二年二月八日、

內裏有穢、仍釋奠停止、

十日、未記直物、

〔貞信公記抄〕 二月十日、有直物事、

中納言從三位紀長谷雄薨、

〔日本紀略〕醍醐天皇 二月十日、己未、中納言紀長谷雄薨、年六十八

十三日、薨奏、

〔公卿補任〕四 中納言從三位紀長谷雄、六十二 二月十日薨、生年承和十二年

乙丑、參木、大辨九年、中納言三年

〔扶桑略記〕醍醐天皇 二月十日、中納言紀朝臣長谷雄薨、年六十八、

〔公卿補任〕四 參議從四位下紀長谷雄、七十 參議故右大辨飯鷹卿六代孫、

內膳正從五位下國守孫、彈正忠貞範男、母、貞觀十八年春補文章生、字紀元

慶五二十五讚岐權少目、業生 同八五廿六讚岐掾、仁和二正十六少外記、同

四十一廿五從五下、寬平二正廿八圖書頭、同三三九文章博士、同四正廿三兼

承和十二年生

官歷

字ハ紀寬

秀才ノ課
試ニ當選ス

掌渤海客
使ト爲ル

尾張介、五月廿三日兼讚岐介、同五二廿二任式部少輔、兼官 同六正七從五上、
八月十六日右少辨、同七八十三正五下、同十六日大學頭、去辨 同八正廿一聽
雜袍、昇殿 十二月十六日從四下、同九五廿五式部大輔、博士 同六月十九日兼侍
從、昌泰二二十一右大辨、兼官 同三五五左大辨、侍從 延喜二正廿六任參議、
左大辨 同三年正月七日從四上、同十一日兼讚岐權守、同七年正月十三日兼
讚岐守、同八年正月七日正四下、同十年正月十三日任權中納言、同日 即敍從三位、
同十一年正月十三日轉正、

〔二中歷〕十二登省歷 東曹 紀家

〔菅家文章〕十牒狀

文章生從八位下紀朝臣長谷雄

牒、伴人、希顏不休、點臚須診、秀才之選、誠在斯人、仍充補如件、謹牒、

元慶三年十一月廿日 從五位上行式部少輔兼文章博士菅原朝臣

〔三代實錄〕四十三陽成天皇 元慶七年四月二日、戊戌、以○中 文章得業生從八位

上紀朝臣長谷雄、爲掌渤海客使、

〔三代實錄〕四十四陽成天皇 元慶七年十二月廿七日、己未、文章得業生從八位上

延喜十二年二月十日

三八七

進士ノ試
得ニ丁科ヲ
檢稅使ト
爲ル

諸道學生
ノ課試ヲ
掌ル

晩年大納
言ヲ望ミ
テ長谷寺
ニ祈ル

世系

紀朝臣長谷雄、敍位三階、以對策得丁科也。

〔菅家文章〕

奏九狀 請令議者反覆檢稅使可否狀、

右臣某謹言、略中又今所點使者在京七人之中、略中式部少輔紀長谷雄者、北

堂文選講說未畢、諸道學生課試有員、略中件等要籍之人、東西出去、經一年餘、

略中

寬平八年七月五日 中納言從三位兼行左大辨春宮大夫侍從菅原朝臣

〔江談抄〕

佛一神事 紀家參長谷寺事

被命曰、紀家爲望大納言、參長谷寺祈請、夢有人告曰、他國可迎、遺イ文章人云々、得

此告之後、不歷幾程逝去云々、

〔紀氏系圖〕

貞範

長谷雄 一名發昭、遣唐使、式部大從二、中納言、

延喜十二、三十薨、八、十、

淑望 從四下、

淑人 從河內守、

淑信 從四上、伊豫守、

家弘 少藏外記、

淑光 參木、從三、

淑行 正五下、山城守、

淑間 山城守、

淑方 正五下、左衛門佐、

淑久

〔紀氏系圖〕

類從本群書

貞範

長谷雄 外記、式部大輔、中納言、

參議、左大辨、宰相之時、遣唐使、一名發昭、儒者策、後撰醍醐天皇御侍讀、于部時

大輔、承和十一年五月十五日夜、於長谷寺懷妊、同十二年乙丑二月誕生、延喜

二年任參議、同十年正月十三日任中納言、六十六、十二年壬申三月十日薨、

六十七歲、

淑望 從四位上、

淑人 從四位下、式部少輔、河內守、

延喜十二年二月十日

淑信 文策河內守伊豫守東宮學士從五位上式部大輔儒者

淑光 少納言藏人勸解由長官

淑行 正五位下山城守

淑間 山城守

淑方 文章得業生

淑久 山城守

淑江 伊勢守

自傳

〔本朝文粹〕

八書序 延喜以後詩序

紀納言

師都良香
ニ推獎セ
ラル

予十有五始志學十八頗知屬文時無援助未遇提獎先師都大夫爲當時秀才

予雖列門徒未及知名于時北堂諸生群飲同賦幽人釣春水之詩先師獨擢予

詩曰綴韻之間甚得風骨依此一言漸增聲價其後信讒遂被疎遠淪翳積年研

精永倦貞觀之末纔登進士之科故管丞相在儒官之日復黨同門未有相許適

見予大極殿始成宴集詩云不意伊人詞藻至此自後屬意數相寄和及予出仕

丞相執政每有文會必先視草予昔侍內宴賦草木共逢春詩曰庭增氣色晴沙

綠林變容輝宿雪紅又九日賦菊散一叢金詩曰廉士路中疑不捨道家煙裏誤

道眞ノ門
ニ黨ス

道眞元白
ノ再生ト
稱ス

島田忠臣
ニ詩評ナ
受ク

高丘五常
ニ知ラル

小野美材
ナ嘉ス

延喜以後
詩卷ヲ作
ル

唐名發超

應燒丞相常吟賞以爲口實乘醉執予手曰元白再生何以加焉予雖知過實猶
感一顧故伊州別駕田大夫作當代之詩匠昔爲美州別駕秩滿歸洛見予舊草
卽語人曰吾始不許紀秀才之文自我不見四五年來躰製非昔可謂日新寬平
年中田大夫臥病遂死故越州別駕高大夫以文見知與予相善遂定交於筆硯
之間遇其無命託以一子至昌泰末管丞相得罪左遷知文之士當時無遺適有
內史野大夫（小野美材）雖云託與不幽然而早成稍過予深嘉之延喜二年忽化異物丞相
在遷所遙哭內史兼歎文章已絕其一句云紀相公獨煩劇務自餘時輩盡鴻儒
後無幾何丞相次薨在朝儒者寔繁有徒咸列王何之輩不習潘謝之流取捨不
同是非各異彼豈爲愛憎而然乎誠不知文牀之趣也司馬遷有言誰爲爲之誰
令聽之故予延喜以後不知好言詩風月徒拋煙華如棄雖關公宴不敢深思只
避格律之責而已若夫觀物感生隨時思動任志所之不勞敢沈吟應響而和甚
於宿構焉搗藻獨吟獨作不肯視人年往月來徒成卷軸題曰延喜以後詩卷後
之見者莫啖不到佳境耳

〔江談抄〕

二雜事 古人名唐名相通名等事

又云古人名唐名相通名等略中紀長谷雄發超

延喜十二年二月十日

三九二

祖父國守
醫善ク

〔古事談〕

六 亭宅 諸道

醫家七代名醫

典藥頭紀國守、中納言長谷

雄卿祖父、春宮御腹病之時、令合芒消

國守醫道
ナ子孫ニ
傳ヘズ

黒丸兼申云、此御藥服御後可令惱亂給、然而遂可有其驗云々、聞食之後、令悶
絶給、依之被下國守身於帶刀陣、帶刀等拔劍宮崩給、可指殺國守之身云々、
次宮平安、御腹病永愈云々、後日國守謂云、宮若御命終者、國守不可存歟トテ、
止醫道畢、於子孫永傳其道云々、

〔三國傳記〕

十一

中納言長谷雄卿事

和云、仁明天皇ノ御宇、彈正忠紀貞範ト云者アリ、其先祖ヲ云ヘハ醫師也シ
カ、父ハ從五位下内膳正國主、依醫師值王難、命ヲ失フヘカリケルカ、天運ニ
ヤ免彼難、其後數百卷ノ醫書ヲ燒キ、子孫ニ顧命シテ、長ク醫道ヲ令捨、貞範
父國主ノ守遺誠、爰累家ノ業ヲ改メ、明法律ヲ學ス、然トモ未タ其家ニ非ル
間、其道ヲ以テ國家ニ仕ル事無キ上ハ、一門短命ニシテ、子孫盡ナントス、家
業ト云ヒ、門葉ト云ヒ、家已ニ絶ナントスル間、貞範歎之、長谷寺ニ參籠シ、我
ニ文道ヲ以テ可興子息一人與ヘ給ヘト祈請シケレハ、百日ニ滿スル承和
十一年五月十五日ノ夜ノ夢ニ、御帳ノ内ヨリ、十二三計ナル童子來テ、貞範
ニ告テ云ク、汝カ一類先生ヲ案スルニ、兵亂ノ時、一門皆官兵トシテ、多ノ人

父貞範子
ナ長谷寺
ニ祈ル

ヲ害ス、天皇世ヲ取テ、後深ク悔之、普下勅懺悔、令修放生會、專行一類受勅、至
心懺悔スルニ依テ、人間ニ生レ、今モ尙朝廷ニ仕フト云ヘ共、殺生ノ□有餘
童子ヲ與ントスレトモ不叶、但シ汝カ祈請懇ナリ、吾レ汝カ子ト成ント云
フ、貞範悅テ、

コノ山ノ松ニカハラヌ身ノ友

トシテトナン打詠、貞範カ膝ノ上ニ居ヌ、貞範夢ノ中ニ、ヤサシキ人ニテ社
御座ケレト、彌ナツカ布覺エケレハ、二ノ袖ヲ合セ、奉抱ト思テ打驚キヌ、則
チ自ラ夢ヲ相シテ云ク、松ト云文字ハ、十八公ト書タリ、觀音ハ十八日ニ利
生ヲ施シ給フ公ナレハ、十八公ト可云、此山ハ、往昔ヨリ以來、觀音利生ノ
道場トシテ、普門示現ノ八大童子、大慈大悲ノミトリニ拔苦與樂ノ使者ト
也、觀音ノ上首トシ、外用利生ノ友トナル、伽藍守護ノ金剛童子ニテ在ヌヤ
ラント思テ、歡喜シテ下向シヌ、果シテ其室懷妊シテ、一人ノ男子ヲ生ス、父
貞範、長谷ノ利生ニテ侍ハトテ、長谷雄ノ卿トソ名付ケル、三歳ノ時、父母共
ニ相具シテ、彼寺ニ參籠シ、御堂ノ東ノ大戸口ニテ、世ニ云習ハセル前生ノ
身ヲ問シカハ、長谷雄答テ曰ク、我ハ是松ノ翠ニ色添ヘテ、往昔ヨリ此山ニ
住シケル童子也ト云、是モ前ノ言ニ同シ心ニ侍也、然レハ觀音ノ利生ニヤ、

長谷雄生

延喜十二年二月十日

三九三

延喜十二年二月十日

三九四

貞範カ祈請ノ如ク、長谷雄卿、學文譽モ世ニ勝レ、儒家ノ棟梁トシテ、三位ニ昇、納言ニ到リ、名譽思ノ如ク昌ヘテ家門ヲ興ス、父カ遺言ニ、常ニ長谷寺ニ參リ、冥加ヲ祈レト云置タリケレハ、時々參ケル中ニ、延喜十二年十月ノ始、長谷雄彼寺ニ詣テ、下向ノ後、程ナク病ニ臥ス、諸子ニ語テ云、先年ノ昔ハ、我レ當寺ニ祈請セリ、今ハ病患如此、記算盡カト云テ、即チ同月十日ニ苦ムコト息テ、生年六十八歲、正念ニ薨ス、其後子孫卿相雲客ニテ侍ケル、是併テ觀音ノ反化ノ利生方便也云々、

〔卅五文集〕本命祭文

維仁和四年歲次戊申二月己巳朔某日甲子（二十日）某姓名（長谷雄）敬設禮奠、謹請天曹、地府、司命、司祿、河伯、水官、掌籍、掌算之神、夫倚伏不定、吉凶相交、慢神者膺其殃、敬鬼者受其福、祭之爲義、不其然乎、奉爲賢姑、將盡禮典、人神合契、福祿何疑、況亦爲祝知命之年、殊設本命之祀、雖欲無答、神其舍諸、伏願諸神特降祉福、使溫順之德、無窮於家庭、慈愛之仁、不衰於氏族、不觸時之感、敢申轉禍之誠、尙饗、

〔扶桑集〕

七 隱逸

秋日諸文友會飲野亭、同賦尋山路隱倫、

紀納言

姑ノ爲ニ
本命祭ヲ
設ク

諸文友ト
會飲ス

後漢書ノ
竟宴ニ列
シテ詩及
ルビ序ヲ
作

一日閑遊忘俗機、更尋幽隱到山扉、交談暮雨依松蓋、于時遇雨故云虛抱秋風納薜衣、泉逐古痕床下繞、雲隨恆□棟間歸、徘徊欲別還爲歎、不用明時遁自肥、

〔扶桑集〕

九 詠史

後漢書竟宴、各詠史、得龐公、紀納言

後漢書者、宋太子詹事范曄之所刪定也、編世十二、錄年二百、名居良史之甲、文擅直筆之華、莫不彰善瘴惡、激一代之清芬、昭德塞違、備百王之炯戒、貞觀十四年秋、明時以此書天下之奇作、令翰林學士巨（巨勢文雄）大夫講之、大夫抵掌而談、提耳無厭、發彼先儒之墨守、擊以後學之蒙求、元慶元年春、擢遷左少丞、職非其勤、講以俄止、功漸爲山、恨如弃井、（道世）管師匠承祖業之後、爲儒林之宗、經籍爲心、得王何於逸契、風雲入思、叶張左於神交、三年冬、遂以其有史漢之癖、令續其講、嗟呼德之有隣、道遂無墜、聽誘進之風者、投斧負笈、染悖誨之化者、虛往實歸、疑關鍵排、非復金湯之險、義淵底徹、終知揭厲之津、及五年夏、披授始畢、明年春、聊仍舊貫、以設竟宴、促膝者、盡是王公之會、盈耳者、莫非金石之音、于時和暖有候、風景不貧、老鶯舌饒、語入詞兒之曲、殘花跼斷、影亂舞人之衣、景傾醉酣、各相語曰、歡會易失、詩酒難并、豈只取樂於今、宜以詠史於古云爾、○本朝文粹ヲ以テ校正ス、襄陽高士獨推君、祿利諠々豈亂聞、清慮遠雖生產忘、素虛遺擬子孫分、逃名始

延喜十二年二月十日

三九五

得身巢穴、晦跡遂辭世垢紛、應是幽栖家不定、暮歸唯宿岷山雲、

〔江談抄〕攝關家事 藤氏獻策始事

藤氏獻策始ハ佐世也、昭宣公ノ家司ニテ、彼家起ニ、天神モ被引添テ令座給ケレハ、時ノ儒者等皆悉不用ケレハ、昭宣公被歎息テ、切々被請云々、予問曰、以何故不請哉、答云、其事有理、紀家良香等云、藤ニ麻幾多天良禮那波、我等カ流ハ不成立シ、不然、藤氏ハ無止流ナレハ、可昇進也ト云々、

〔菅家文章〕詩五 同紀發詔、奉和御製七夕祈秋穗詩之作、

非書非劔我君明、千尺願絲一箇情、珍重素風初七夕、待來銅雀第三聲、佳期恰似時難遇、巧思祇同月易盈、偏祝西成兼所感、四鷗晝夜破行程、

〔寬平御遺誠〕長谷雄博涉經典、共大器也、莫憚昇進、新君愼之、略上

臣、菅家、定國朝臣、季長朝臣、長谷雄朝臣、此五人其こゝろをえれり、顧問もそあはりぬへしとて、寬平法皇注申させたまひける、かく思召とらせ給ける、やむことあき事あり、

〔古今著聞集〕政道忠臣 延喜聖主、位あつるせおひしまして後、本院左大臣、菅家、定國朝臣、季長朝臣、長谷雄朝臣、此五人其こゝろをえれり、顧問もそあはりぬへしとて、寬平法皇注申させたまひける、かく思召とらせ給ける、やむことあき事あり、

〔江談抄〕

詩五 其 字和名事

字多法皇
大器下評
シ給フ

都良香等
下佐世ノ
獻策ニ反
對ス

字多天皇
和シ奉ル

醍醐天皇
備ノ顧問ニ
ハル

渤海ノ作
字ヲ訓ズ

紳ニ書シ
テ自ラ誠

兒孫ニ教
フ

白髮ヲ歎
ズ

詩人

被命云、延喜御時、渤海國使二人來朝、其牒狀爾、此兩字各爲使二人姓名、紀家見之、雖未知文字、呼云、并木ノツフリ丸、并石ノマフリ丸、參レト喚、各應會參云々、異國作字也、以當時會釋讀之、可謂神妙者也、異國人聞而感之云々、

〔朝野群載〕辭一 文筆上 書紳辭 紀納言

靡恃人之知、勿誇己之賢、須懷誠與慎、以思身之全、

〔作文大體〕五言絕句詩

與兒孫詩、用歌韻自平聲起、付第 紀納言長谷雄作

六句餘日少、三途苦時多、

不義非吾富、兒孫莫奈何、

〔朝野群載〕一 猪熊信男氏所藏本 歎白髮口號 紀

寒暑運來往、少壯隨不常、使我年鬢色、化如秋水浪、吾生過六旬、誰恨理所當、矧乎多檢束、猶未免奔忙、早興待殘漏、晚歸斜日光、其間勞思慮、不知性損傷、老邁與勤苦、混爲頭上霜、

〔中歷〕十二 詩人歷 儒者 公卿 紀納言長谷

延喜十二年二月十日

詩作者 扶桑集七十六人略○中 紀納言

〔朝野群載〕 詩一序 文筆上 日觀集序

從四位下式部大輔兼學士大江朝臣維時

○上天慶儲宮略○中 從在藩之時令狎近之輩採撫風人墨客律詩起於承和泊于延喜一十人入選略○中 其所擢用者相公野篁大夫良春道相公菅是善相公江音人相公橘廣相大夫都良香丞相菅道真相公善清行納言紀長谷雄大夫江千古亦辨時代之先後不依官爵之高卑略○下

〔作文大體〕 七言詩

草樹暗迎春

紀納言長谷雄作

春生無跡漸從東

草樹相迎暗至中

題目

向暖因緣唯媚景

尋陽媒介足柔風

破題

庭增氣色晴沙綠

林變容輝宿雪紅

譬喻

芳艷不知何處契

誰教計會一時通

述懷

五言四韻詩

賦月詩用歌韻自他聲起

紀納言

日觀集ノ作者ニ列ス

詩

皎々孤懸月 清光萬里過
映軒添粉壁 臨水起金波
魏鵲飛無止 吳牛喘幾多
落耀留不得 惆悵仰纖河

〔朝野群載〕

賦一

文筆上

春雪賦

以盈尺表瑞為韻

紀納言長谷雄

雪之逢春深不過尺一時於山澗同色於沙磧凝地而纔沒馬蹄滿庭以漸封鳥跡或逐風不返如振群鶴之毛亦當晴猶殘疑綴衆狐之腋觀夫皎然影亂飄爾質輕懸天有色墜地無聲埋園蔬而稚牙自沒掩門柳而老絮相驚乍助畫帷之夜光縹帙自照忽入粧樓而朝舞粉匣盡盈况亦搖颺於和暖之中粉飛於煙雲之表點人皆催二毛之年拂窓未辨孤月之曉寒花鉤而珠簾映望畫梁以玉塵繞參差落水暗伴負水之鱗聚散遍林欲閉宿巢之鳥既而地毛肥土膏施農畝普液泉脈遠被豈止宿墻陰而夕寒忽能混郊外之濟氣適在遲日之可樂還知豐年之致瑞○本朝文粹同

〔朝野群載〕

○一猪

熊信男氏所藏本

春風歌應製

紀納言

延喜十二年二月十日

四〇〇

春風扇，春色新，習々々何處起，青蘋末與土囊脣，搖颺不閑花，逆面婆娑無力，柳遮人，無心又无眼，乍拂長安陌上塵，暗來還暗去，深動寒江水，下鱗歌妓遏雲，便送響，舞娥辭月易迴身，皇恩給兮侍臣醉，化無方兮德有隣，聞來淺深和暖意，其奈無涯大王仁。

〔朝野群載〕

○猪熊信男氏所藏本

葉落吟 紀納言

秋風起，秋葉飛，一別故林何處去，空中遍滿樹中稀，君不見春榮秋悴自然運，譬如壯去老無歸，都大盛衰知定理，莫悲搖落樂芳菲。

〔朝野群載〕

○猪熊信男氏所藏本

落花歎 紀納言

君不見滿樹花顏咲，向風微々落落委塵中，又不見昨日少年子，今朝變作白頭翁，榮有悴，始有終，人間誰與世無窮。

〔朝野群載〕

○猪熊信男氏所藏本

慣啄木曲

紀

- 一莫買鋸刃劍 虛剪絲篔簹 我有纏怨緒 知其怨斷難
- 二莫趁靈方藥 虛聽金丹丸 我有病清貧 知其病治難
- 三莫嘗來樂酒 虛考一醉漿 我有憂沈困 知其憂忘難

四莫好抽身學 虛費人心肝 我有抱苦辛 知其苦堪難

五劍不能斷怨緒 藥不能補清貧 酒不能忘沈困 學不能補苦辛 不如

君三首佳什 常置屋邊谷精神

〔本朝文粹〕

雜詩 貧女吟

紀納言

有女有女寡又貧，年齒蹉跎病日新，紅葉門深行跡斷，四壁虛中多苦辛，本是富家鍾愛女，幽深窓裏養成身，綺羅粉粧暗無暇，不謝巫山一片雲，年初十五顏如玉，父母常言與貴人，公子王孫競相挑，月前花下通慇懃，父母被欺媒介言，許嫁長安一少年，少年無識永無行，父母敬之如神仙，肥馬輕裘與鷹犬，每日群遊俠客筵，交談扼腕常招飲，一日之費數千錢，產業漸傾遊獵裏，家資徒竭醉歌前，十餘年來父母亡，弟兄離散去他鄉，簪夫相厭不相顧，一去無歸別恨長，日往月來家計盡，飢寒空送幾風霜，秋風暮雨斷腸晨，憶古懷今淚濕巾，形似死灰心未死，含怨難追舊日春，單居抱影何所在，滿鬢飛蓬滿面塵，落々戶庭人不見，欲披悲緒遂無因，寄語世間豪貴女，擇夫看意莫見人，又寄世間女父母，願以此言書諸紳。

山家秋歌 越調

紀納言

延喜十二年二月十日

四〇一

延喜十二年二月十日

四〇二

一身漂泊厭浮名，試避喧喧毀譽聲。秋水冷暮山清，三間茅屋送殘生。
幽栖何事且營營，藥圃荒涼手自耕。溪水咽嶺松驚，斷腸媒介是秋聲。
空山幽靜水潺湲，獨臥雲中不限年。休世夢斷塵緣，莓苔唯展坐禪筵。
卜居山水息心機，不屑人間駁是非。肩澗戶掩松扉，秋寒只納薜蘿衣。
登臨南北又東西，本自幽人不定栖。秋鶴老暮猿啼，結交留宿舊青溪。
門前秋水後秋山，盡日蕭蕭眺望閑。人不到路難攀，唯看隨例暮雲還。
吾家嶺外枕江干，浪響松聲日夜寒。忘老至計身安，乘閑空把一魚竿。
寂寞山家秋晚暉，門前紅葉掃人稀。甘長住誓不歸，只聽泉聲枕上飛。

〔和漢朗詠集〕

春上 早春

庭增氣色晴沙綠，林變容輝宿雪紅。紀長谷雄

〔和漢兼作集〕

春一部上

草樹暗迎春，○詩略ス、和漢中納言紀長谷雄十五首

春風扇微和

搖樹漸知花面目，過園偷動藥君臣。

〔江談抄〕

長句事 連句○中五言

二藍經一夏，菅朽葉幾廻秋。紀

連句

菅原文時
ノ詩評

〔江談抄〕

詩五 菅家御草事

又被命云，菅三品云，菅家御草者，如削龜甲，其上如綵鏤，非心力之所及，紀家作者，如削拾木，加磨瑩，何物可用之，尤可庶幾云々，然則況於區々之末學，其自豈樂云々，問菅家御作者眼不及，文集者眼及，是何故哉，寄其時代，寄其文章，此等庶幾歟。（大江匡房）

〔江談抄〕

四

人烟一穗秋村僻，猿叫三聲曉峽深。秋山閑望 紀納言

人烟近代忌之不作

〔伏見宮御記錄〕

新寫九
紀家集

○端

奉和菅納言行幸後，憶雲林院勝趣，見寄長句。次韻，○詩略ス、

式部少輔紀朝臣長谷雄

昌泰元年歲次戊午十月廿日競狩記。○文略ス、下同

法華會記

仁和寺法華會記

文

大江匡房
ノ詩評

延喜十二年二月十日

四〇三

延喜十二年二月十日

亭子院賜飲記

東大寺僧正眞濟傳

白石先生傳

〔本朝文集目錄〕

卷上 第三十二

紀長谷雄

春雪賦

柳化爲松賦

風中琴賦

醍醐天皇奉答宇多天皇請停尊號書

宇多天皇請停封戶書

宇多天皇賜渤海表迴書

宇多天皇授無位藤原忠平正五位下記

宇多天皇重停尊號狀

延喜以後詩序

八月十五夜同賦天高秋月明應制詩序

八月十五夜陪菅師匠望月亭賦桂生三五夕詩序

白箸翁詩序

後漢書竟宴各詠史得龐公詩序

九日後朝侍宴朱雀院同賦秋思入寒松應太上皇制詩序

仲春釋奠聽講禮記同賦桃始華詩序

落花詞應制詩序

早春侍清涼殿同賦草樹暗迎春應制詩序

對殘菊待寒月詩序

惜秋翫殘菊應制詩序

同諸才子九月三十日白菊叢邊令飲詩序

九日侍宴觀賜群臣菊花應制詩序

九月盡日惜殘菊應制詩序

太上法皇賀玄宗法師八十齡和歌序

盃銘 廻文

硯銘 廻文

延喜十二年二月十日

延喜十二年二月十日

累代寶琴銘

亭子院賜飲記

贈渤海國中臺省牒

書紳辭

第三皇子加元服祝文

仁和寺圓堂供養願文

通文ノ孟
銘

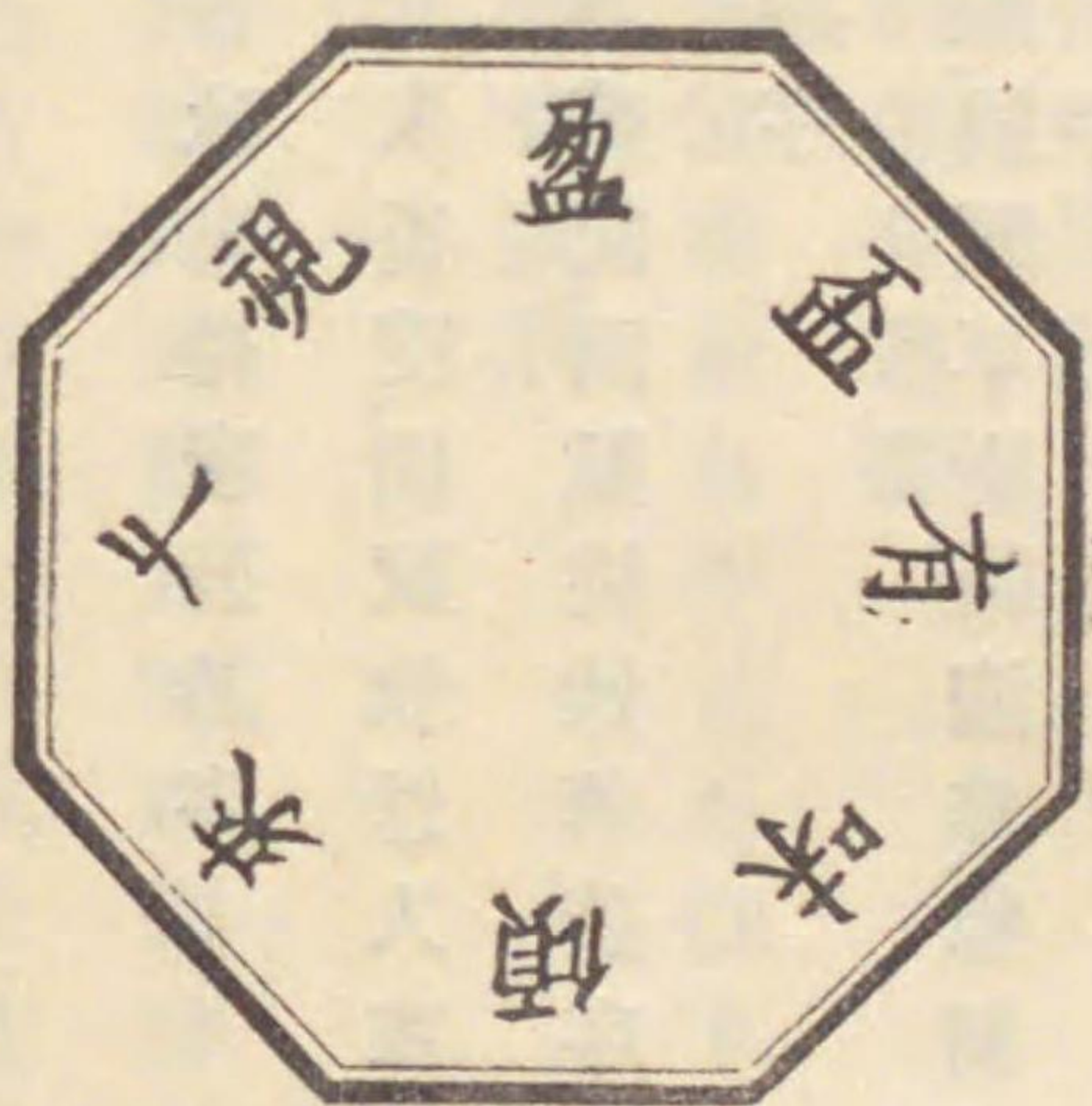
〔本朝文粹〕

銘十二

孟銘

通文

紀納言

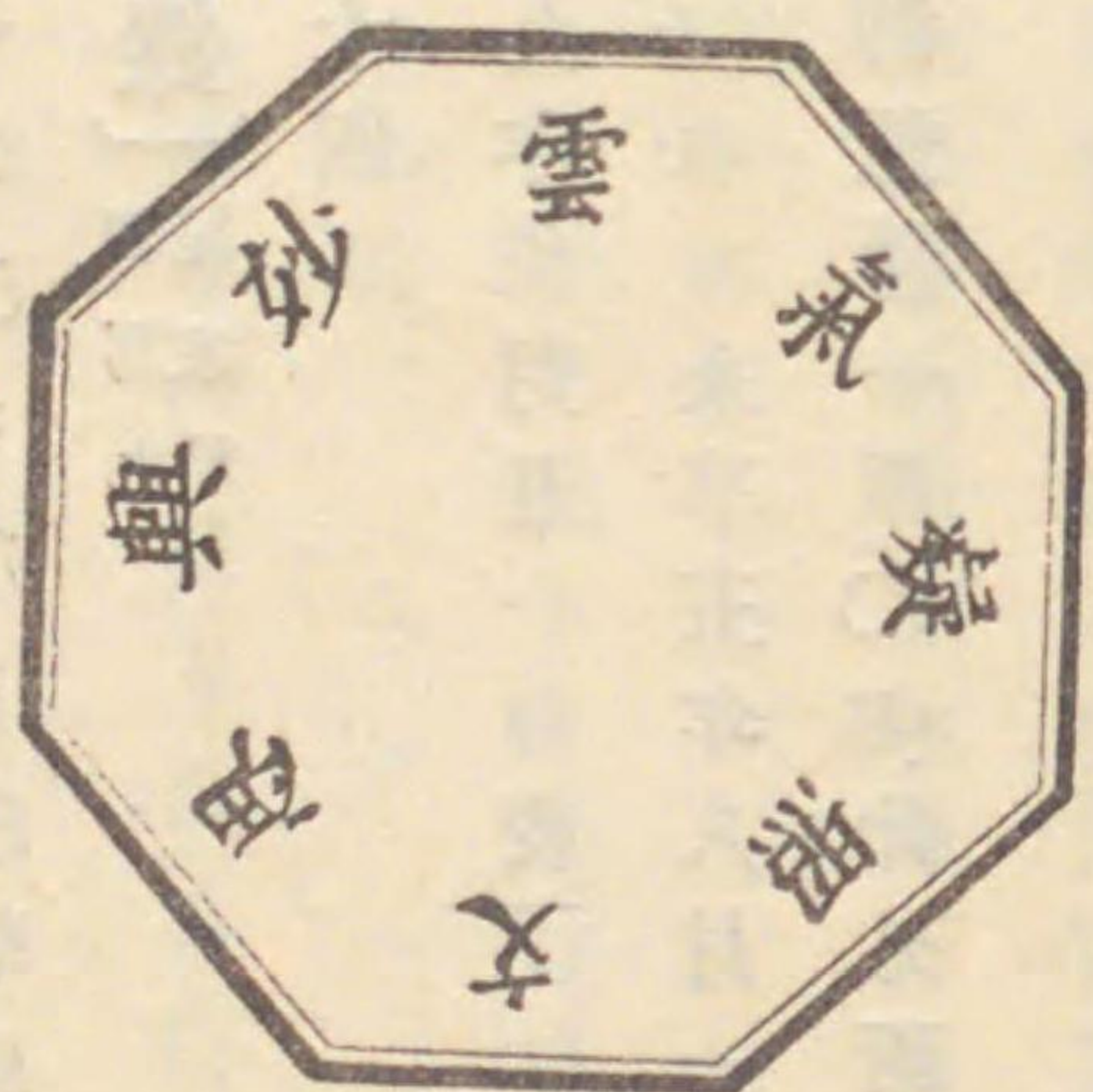


同硯銘

硯銘

通文

紀納言



〔江談抄〕

長六句事

谷水洗花、汲下流而得上壽者三十餘家、地血和味、浚日精而駐年規者、五百箇

歲群臣賜菊花

高五常序、有似此序之作、古人傳云、五常作後、以言被稱、自餘頗催此序、可到

佳境、以仍此序云々、

〔勅撰作者部類〕

自帝王至

長谷雄從三位、中納言、彈正忠紀、扶籠

後撰集

戀春上、戀二、紀長谷雄朝臣、戀三、中納言長谷雄朝臣

延喜十二年二月十日

四〇七

大江匡房
ノ文評

歌什

四〇六

延喜十二年二月十日

〔日本紀竟宴和歌〕

六年喜

得天命開別天皇

參議左大辨從四位上兼行讚岐權守紀朝臣長谷雄

佐々奈美乃與須留宇美倍爾美夜波之女與々爾多江奴加支美加美乃知波

〔後撰和歌集〕

戀十歌二

人につかはしける、紀長谷雄朝臣

ふしてぬる夢路にたにもあはぬ身は猶淺ましき現こそ思ふ

〔後撰和歌集〕

戀十一歌三

いひかはしける女の今は思ひ忘れぬといひ侍り

ければ、

長谷雄朝臣

我爲は見るかひもなし忘草忘るはかりの戀にしあらねは

〔伏見宮御記録〕

新寫九

紀家集卷第十四

延喜十九年正月廿一日夜

江朝綱記之

〔看聞日記〕

十七

永享五年八月一日、早旦室町殿御憑進之、

洞進内裏へ御琵琶一面、略此外兩種進、仙洞三種、其内雙子二帖、詩册長谷雄卿集累

代祕藏物也

〔扶桑略記〕

醍醐天皇下

延長四年五月廿一日、召興福寺寬建法師於修明

歿後家集
ナ唐ニ流
布セシメ
ラル

長谷雄ト
敦固親王

長谷雄ト
藤原基經

門外、奏請就唐商人船入唐求法、及巡禮五臺山、許之、略中請此間文士文筆、菅

大臣、紀中納言、橘贈中納言、都良香等詩九卷、菅氏、紀氏各三卷、橘氏二卷、都氏

一卷、但件四家集、仰追可給、道風行草書各一卷、付寬建、令流布唐家、略中已上

〔後撰和歌集〕

春一歌上

あいしりて侍りける人の家にまかれりけるに、梅

の木侍りけり、此花さきなむ時は、必せをこそむといひけるを、音な

く侍りければ、

朱雀院の兵部卿のみこ

梅の花今は盛りになりぬらむたのめし人の音つれもせぬ

かへし

中納言長谷雄朝臣

春雨にいかにも梅や匂ふらむわか見る枝は色もかはらす

〔扶桑集〕

孝九

陪相國東閣聽諸小侯聚學孝經一首、

紀納言

夫孝者百行本也、莫不資父事君、因嚴敬、敬出於家庭而及於天下、盛於揚名而
終於顯親、孝之爲道、不其然乎、相國天然之性、孝根其心、將寫先聖之襟懷、以鑒
後生之耳目、遂命碩學、授此小侯、大化滂流、遙源勸在、諸小侯或居韶亂之年、或
在綺紈之服、指以竹騎、更發叩鐘之情、聚彼艸螢、始齒函丈之列、期其陶染、知幾

延喜十二年二月十日

四〇九

延喜十二年二月十日

曾參于時 下欠

長谷雄ト
菅原道眞

〔菅家文章〕

詩二

勸吟詩寄紀秀才（長谷雄）立義以來有識之士或公或私爭好論議

辱凌轢而已故製此篇寄而勸之○詩略

詩情怨（古調）呈菅著作兼視紀秀才

去歲世驚作詩巧（元慶七年）今年人謗作詩拙鴻臚館裏失驪珠卿相門前歌白雪非顯名
賤匿名貴非先作優後作劣一人開口萬人喧賢者出言愚者悅十里百里又千
里駟馬如龍不及舌六年七年若八年一生如水不須決一生如水穢名滿此名
何水得清潔天鑿從來有孔明人間不可無則哲惡我偏謂之儒翰去歲世驚自
然絕呵我終爲實落書今年人謗非眞說

〔菅家文章〕

詩五

賦葉落庭柯空（頭書）扶十三（元平五年）勒冬從龍松容封農重縫鋒從逢峯春慵蜂

亭

遇境幽人意乘閑卒歲冬庭承水氣靜葉逐晚風從誰見桐棲鳳唯聞竹嘯龍囂
塵先落柳絕澗後凋松地脈生相寄天姿勢不容青苔隨徑合白雪滿枝封案戶
驚愁婦窺園惱老農飄々依砌聚片片擁塔重遂使輕紅滅何教碎錦縫破殘寒
月鏡來迫曉霜鋒燎照偷光手沙穿散藥蹤新賓詩秋積逆旅醉鄉逢舉眼無疎

長谷雄ト
三善清行

蔭廻頭只遠峯形骸疲外役夢想到高春賞翫輸誠洽攀援得力慵星稀雖遠鵲
花嫩未期蜂觸感孤心苦傷懷四面攻欲催春管律頻待夜更鐘分任循環運年
如轉轂衝榮枯同物我雨露爲誰濃

〔江談抄〕

雜事

善相公與紀納言口論事

又被談云善相公與紀納言口論之時善相公云無才博士ハ和奴志與利始也
砥云介利于時紀家秀才也云々以之思之善家無止者也孝言聞云龍乃咋合
ハ久比布勢良禮多留仁和呂加良須他獸ハ不倚付者也云々

〔今昔物語〕

本朝十四世俗

三善清行宰相與紀長谷雄口論語第廿五

今昔延喜ノ御時ニ參議三善清行ト云人有リ其時ニ紀長谷雄ノ中納言秀
才ニテ有ニケル清行ノ宰相ト聊ニ口論有ケリ清行ノ宰相長谷雄ヲ云ク无
才ノ博士ハ古ヨリ今ニ至テルマ世ニ无シ但シ和主ノ時ニ始マル也ト長谷
雄此ヲ聞クト云モヘト更ニ答フル事无ケリ此ヲ聞ク人思ハク然許止事无
キ學生ナル長谷雄ヲ然カ云ハケム清行ノ宰相事ノ外ノ者ソニコ有トソ讚メ
感ルシケ況ヤ長谷雄答フル事无レハケ理ト思ニケル其時ニ亦（惟宗）ノ孝言ト
云フ大外記有ケリ止事无ケル學生也彼ノ口論ノ事ヲ聞テ云ケル龍ノ咋

延喜十二年二月十日

四一一

惟宗孝言
ノ評

清行無才
ノ博士ト
言ル

合ハ被昨臥タリ云モト不弊他ノ獸ハ不寄付事也ト云ケル此ハ長谷雄、
 清行ノ宰相ソニ此ク被云メ他ノ學生ハ思ヒ懸ヤト云心ヘナル此ヲ聞ク人、
 現ニ然ル事也トナ云ケル然レハ長谷雄實ニ止事无キ博士トモ、尙清行宰
 相ニハ劣コソルニ其後長谷雄中納言マテ成上テ有ニケル大納言ノ闕有ルニ
 依テ此ヲ望ムト長谷ニ詣テ觀音ニ祈リ申シケ夜ノ夢ニ示シテ宣ハク汝
 チ文章ノ人ニタル依テ他國ヘ可遣キ也ト見テ夢覺ヌ何ナル示現ニカ有ム
 ト怪ミ思テ京ニ返ケリ其後長谷雄ノ中納言幾程ヲ不經シテ死ニケ然レ
 ハ示現ノ如ク他國ニ生リトソケ人疑ルセ世ニ紀中納言ト云此レ也、

〔江談抄〕

詩五 輔尹、舉直、一雙者也事

又被命云、略中、(三統) 高五、常工、詩者也云々又云、

紀家深

被感五常

長谷雄ト
斐趣

長谷雄ト
高丘五常

〔菅家文章〕

詩二

去春、詠渤海大使與賀州善司馬贈答之數篇今朝重吟和
(元慶六年)
(長谷雄)
 典客國子紀十二丞見寄之長句感而翫之聊依本韻

掌上明珠舌下霜、風情潤色使星光、春遊惣轡州司馬、夏熱交襟典客郎、恨我分
 庭勞引導、饒君遇境富文章、若教毫末逢閑日、莫惜縱容損數行、

〔菅家文章〕

詩五

客館書懷、同賦交字、呈渤海裴令大使、(貞平七年)
(長谷雄)
 奉勅旨與吏部紀侍

尋思執手昔投膠、拜觀慙慙不慙拋、雪鬢同年分岸老、風情一道望雲交、皎駒再
 食場中糞、儀鳳重歸閣上巢、借問高才非宰相、揚雄幾解俗人嘲、

〔今昔物語〕

本朝十四世俗

北邊大臣長谷雄中納言語第一、

今昔、略中 中納言長谷雄ト云ケル博士有ケリ世ニ並无ケル學生也其人月
 ノ明リケ夜大學寮ノ西ノ門ヨリ出テ禮□ノ○字治大納言物橋ノ上ニ立
 テ北様ヲ見ハケレ朱雀門ノ上ノ層ニ冠ニテ襖著タル人ノ長ハ上ノ垂木近
 ク有ルカ吹チシ文ヲ頌シテ廻ルナ有ケル長谷雄此ヲ見テ我レ此レ靈人
 ナ見ル身乍ラモ止事无クナ思ケル此レ亦希有ノ事也昔ノ人ハ此レ奇異
 ノ事共ヲ見顯ス人共ナム有トケル語リ傳ルヘタトヤ、

〔紀中納言繪詞〕

中納言長谷雄卿は、學九流にわたり、藝百家に通して、世に
 おもくせられし人なり、ある日、ゆふくれ方に内へまいらむとせられける
 時、見もしらぬ男のまなこ、あかしこけにて、たゞ人ともおほえぬ來りて云、
 つれづれに侍て、双六をうたはやと思給に、それかたき、おそろくきみはか

長谷雄ト
神ニ通ズ

雙六ニ巧
ナリ

延喜十二年二月十日

四一四

朱雀門ニ
テ鬼神
ヲ輸ト
ノテ争
ト説

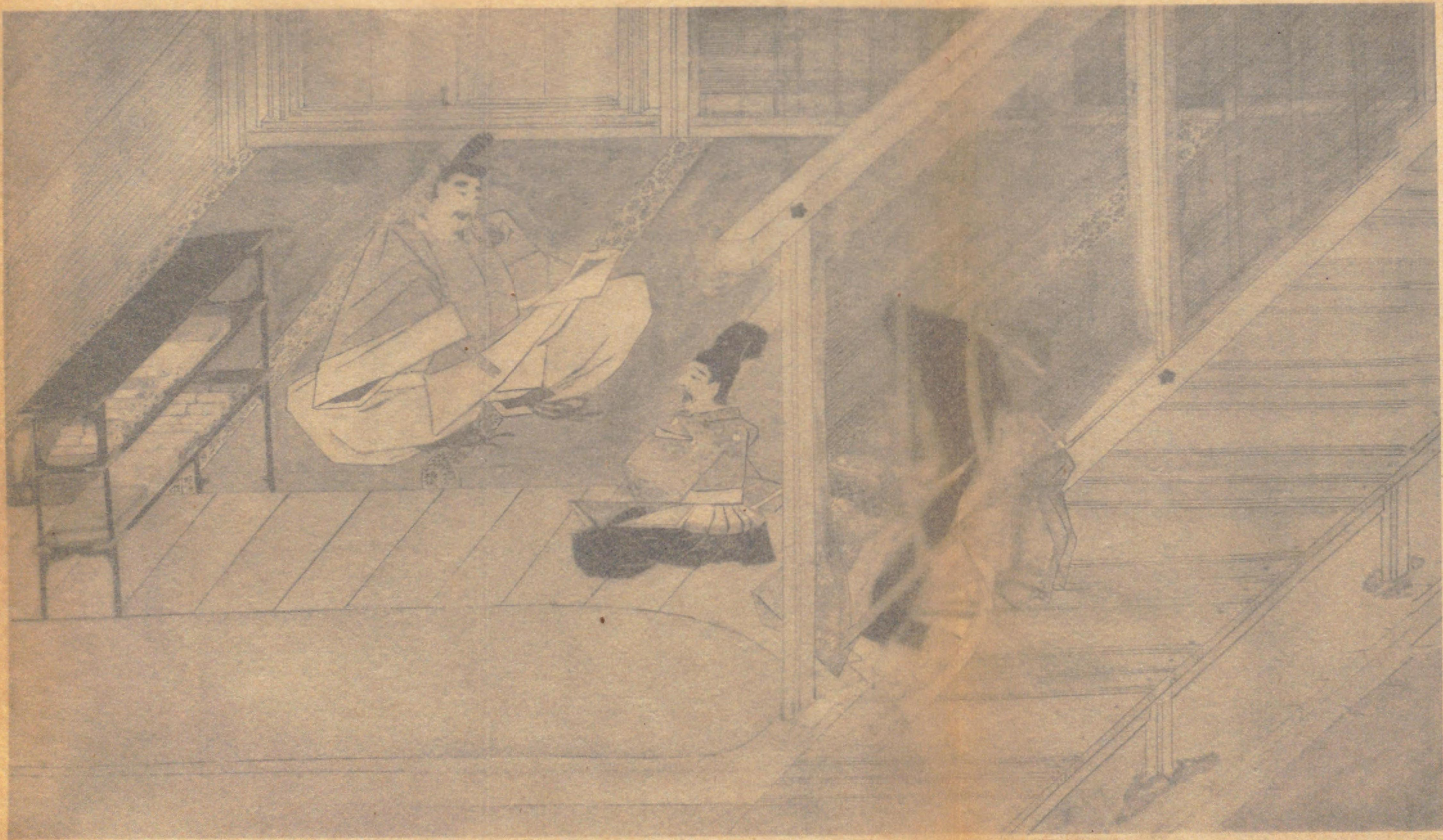
りこそおはせめとおもひよりてまいりつるなりといへは、中納言あやし
くおもひなから、ころみむとおもふ心ふかくして、いと興ある事也、いつ
くにてうつへきといへは、これにてはあしくはへりぬへし、わかるたる所
へおはしませといへは、さらなりとてもものにもならず、どものものもくせ
す、たゝひとりおどこにしたかひてゆくに、朱雀門のもとにいたりぬ、この
門の上へのほりたまへといふ、いかにものほりぬへくもおほえねと、男の
たすけにてやすくのほりぬ、すあ^{はちか}らはむてうをとりむかへて、かけもの
にはなにをかし侍へき、われまけたてまつりなれ、君の御心に、みめもすか
たもこゝろはへもたゝならぬとこなく^{ふ殿}おほさむさまならむ女をたてま
つるへし、君まけたまひなは、いかにといへは、わか身にもちたらんたから
をさなからたてまつるへしといへは、しかるへしとてうちたるほどに、中
納言たゝかちにかちければ、男しはしこそ尋常の人のすかたにてありけ
れ、まくるにしたかひてさいをかき、心もくたくるほどに、もとのすかたあ
らはれて、おそろしけなる鬼のかたちになりけり、おそろしとおもひ
けれども、さもあれ、かちたにしなは、かれはねすみにてこそあらめとねむ

長谷雄卿繪詞

長谷雄卿宅ノ圖
東京帝室博物館所藏

原寸 〇・二九七





長谷雄卿繪詞

長谷雄卿宅ノ圖
東京帝國博物館所藏

原寸 縦〇・二九七

細言たゝかちにかちれれし男し
 れまくるにしたかひてさいをかき心もくたくるほとにもとのすかたあ
 らはれておそろしけなる鬼のかたちになりけりおそろしとおもひ
 けれどもさもあれかちたにしなはかれはねすみにてこそあらめとねむ



長谷雄卿繪詞
 長谷雄邸宅ノ圖
 東京帝國博物館所藏

原寸 縦〇・二九七

れ、まくるにしたかひてさいをかき、心もくたくるほごに、もとのすかたあ
 らはれて、おそろしけなる鬼のかたちになり、おそろしとはおもひ
 けれども、さもあれ、かちたにしなは、かれはねすみにてこそあらめとねむ

してうちけるほどに、つゝに中納言かちはてにけり、そのときまたありつ
るおどこのかたちになりて、いまは申におよはず、さりともそこをおもひ
はへりつれ、からくもまけ奉りぬるものかな、しかしその日わきまへ侍へ
しといひて、もとのことくおろしてけり、中納言あさましとおもひながら、
たのめし日になりにければ、したまたれつゝ、さりぬへきかたどりしつら
ひてまちゐられたり、夜ふくるほどに、ありし男、ひかるかことくなる女、
してきて、わきまへにけり、中納言めもめつらかにおほえて、これはやかて
たまはるかごとへは、さうにおよはず、まけたてまつりてわきまへぬるう
へは、あへしたまふへきやうなし、但こよひより百日かうちにおかし給な
は、かならずほいなるへしといへは、いかにものたまはせむまゝにとて、
女をはとめておどこをはかへしつ、夜あけてこれを見れば、目もこゝろ
もをよはず、この世にかゝる人や隔るへきとあやしき事かきりなし、やゝ
日をふるまゝに、こゝろさまもなつかしく、いとそひまさりして、かたど
きもたちさるへくもおほへさりけり、かくて八十日はかりになり、けれ
は、いまは日數もおほくつもりぬ、かならず百日としもさすへきことかは

延喜十二年二月十日

延喜十二年二月十日

四二六

小野天神
ヲ念ズ

陰陽ノ方
ヲ知ラズ
トノ説

と、たへかたくおほえてしたしくなりたりければ、すなはち女水になりて
 流れうせにけり、中納言くひのやちたひかなしめども、さらにかひなかり
 けり、かくて三月はかり有て、夜ふけて中納言内より出られける道に、あり
 し男行、あひて、車のまへのかたよりきて、君は信こそおはせさりけれ、こゝ
 ろにくうこそおもひきこえてしかとて、氣色あしくなりて、たゞよりにち
 かつきければ、中納言こゝろをいたして、小野天神たすけたまへとねんし
 侍けるときに、空にこゑありて、ひむなきやつかな、たしかにまかりのけと
 おほきにいかりてきこえけるとき、男かきけすことくうせにけり、この男
 は朱雀門の鬼なりけり、女といふも、もろくの死人のよかりし所どもを
 どりあつめて、人につくりなして、百日すきなは、まことの人になりて、たま
 しひさたまりぬへかりけるを、くちおしく契をわすれておかしたるゆへ
 に、みなとけうせにけり、いかはかりかくやしかりけん、抄同訓

〔今昔物語〕本朝十八世俗 中納言長谷雄家顯狗語第廿九
 今昔、中納言紀ノ長谷雄ト云フ博士有ケリ、才賢ク悟廣クシ世ニ並ヒ无ク
 止事无キ者ハニテ有トモ、陰陽ノ方ムナ何ニモ不知ケリ、而ル間狗ノ常ニ出

來テ、築垣ヲ越ツ、尿ヲシケレ、怪ト思テ□□ノ□□ト云フ陰陽師ニ、
 此ノ事ノ吉凶ヲ問レバ、某ノ月ノ某ノ日、家ノ内ニ鬼現スル事有トス、但
 シ人ヲ犯シ祟ヲ可成キ者ニハ非スト占レバ、某ノ日物忌ヲ可爲キト、
 云テ止ヌ、而ル間、某ノ物忌ノ日ニ成テ、其ノ事忘レテ、物忌ヲモ不爲ケリ、然
 テ學生共ヲ集メテ、作文シテ居ルニ、文頌スル盛ニ、傍ニ物共取置ケル塗
 籠ノ有ケル内ノ方ニ、極テ怖シ氣ナル者ノ音ニテ吠ケレ、居並タル學生共、
 此ノ音ヲ聞テ、此レハ何ノ音ソ□□ト云ツ、恐チ迷ケル程ニ、其ノ塗籠ノ
 戸ヲ少シ引開ルヨリケ、動出ル者有リ、見レハ長二尺許リ有ル者ノ、身ハ白ク
 テ頬ハ黒シ、角ノ一ツ生テ黒シ、足四ツ有テ白シ、此レヲ見テ皆人恐迷フ事
 无限シ、而ルニ其ノ中ニ一人ノ人、思量有リ心強ケル者ニテ、立走ルマ、此ノ
 鬼ノ頭ノ方ヲハタト蹴レバ、頭ノ方ノ黒キ物ヲ蹴抜キツ、其ノ時ニ見レ
 ハ、白キ狗ノ行ト哭テ立テリ、早ウ狗ノ椽ヲ頭ニ指入ルヲ、椽ヲ蹴抜マ、
 ニ、見レハ、狗ノ夜ニ塗籠ニ入ルカ、椽ニ頭ヲ指入ルヲ、否不引出テ鳴ク音ノ
 怪シキ也ケリ、其レカ走り出テ、物恐チ不爲ス、量リ有ケル者ノ狗ノ、然カ
 有ケル也トケリ、見テ、蹴顯ルシタケリ、此ヲ見テ、後ムナ人共肝落居心直ルケ

延喜十二年二月十日

四二七

其ノ後ハ集テ咲ケル、然レハ實ノ鬼ニ非_テト現ニ人ノ目ニ鬼ト見_レユレ鬼トハ占ケル也、其レニ人ヲ犯シ祟ヲ可成_キ者ニハ非スト占_ルヒタ實ニ微妙キ事也ト云テソ人々皆占ヲ讚メ惶_ルリケ但シ中納言ノ然許才有_ル博士ニハ、物忌ノ日ヲ忘_ル最ト云フ甲斐无_ウ弊_キ事也トソ聞ク人謗ケル、其ノ比ハ、此ノ事ヲナ世ニ云ヒ繚ヒ咲ケルト語リ傳_ルヘタトヤ、

〔廣隆寺來由記〕

實相寺

丈六盧舍那佛像

正觀音

毘沙門天

於實相寺有東西南北中五箇院宇、眞濟僧正建之、爲紀納言等一族氏寺也、

○長谷雄ノ遣唐副使ニ補セラル、コト、寛平六年八月二十一日ノ條ニ、重陽宴ニ應製ノ詩ヲ上ルコト、同九月九日ノ條ニ、勅ヲ奉ジテ、菅原道真ト共ニ、渤海大使裴頴等ヲ饗應スルコト、同七年五月十四日ノ條

氏寺實相寺

ニ、雲林院ニテ、宇多天皇ノ御製ニ和シ奉ルコト、同八年閏正月六日ノ條ノ補遺ニ、齊世親王ノ御讀書始ニ文選ヲ講ズルコト、同二月十三日ノ條ニ、同親王御入門ノコト、同十二月十三日ノ條ニ、累代寶琴銘ヲ作ルコト、同年末雜載、文藝ノ條ニ、重陽後朝宴ノ詩ヲ作ルコト、同九年九月十日ノ條ニ、内宴ノ序ヲ作ルコト、昌泰元年正月二十日ノ條ニ、群書治要ヲ天皇ニ授ケ奉ルコト、同二月二十八日ノ條ニ、重陽後朝宴ノ詩序ヲ作ルコト、同九月十日ノ條ニ、宇多上皇ニ供奉シ、競狩記ヲ作ルコト、同十月二十日ノ條ニ、朔旦冬至ノ賀表ヲ作ルコト、同十一月一日ノ條ニ、大藏善行ノ七十賀詩序ヲ作ルコト、延喜元年九月是月ノ條ニ、菅原道真ヨリ詩集ヲ託セラル、コト、同三年二月二十五日ノ條ニ、藤原時平等ト延喜格ヲ選ブコト、同七年十一月十五日ノ條ニ、長谷雄ノ薨去ニ依リテ、列見ニ音樂挿頭ヲ停ムルコト、本年二月十一日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔正倉院文書〕

一 東南院文書 一 櫃第六卷

延喜五年十二月廿六日太政官牒

延喜十二年二月十日

四二〇

飛驒守紀 朝臣

自署

紀家傳

長谷雄冊子

〔本朝書籍目錄〕

傳記

紀家 一卷

〔考古畫譜〕

九部

長谷雄雙紙 一卷

補本朝畫圖品目云紀長谷雄草子一卷畫者不傳

補古畫目錄云紀長谷雄緣起摹本屋代太郎家に在り

好古小録云畫工姓名不傳摸本二種あり破裂不全もの佳本也全者は俗手の補ひなり

古物語類字抄云此物語は紀長谷雄卿朱雀門の樓にのぼりて鬼神と雙六をうちたりしに美女をかけものにしたりけるがはせをの卿かちにければいみじき女房を得て寵愛の餘りに七十五日のちに會べしと鬼神のいましめたりしをもおはず日ならずして寐たりければその女とみに水になりてながれ失けるよしをかけり畫工は土佐行長といふ

土佐行長筆トノ説

ふ説ありとみゆ

板谷桂舟曰此卷畫工雖有説々克肖在柄天神緣起可爲左近將監行長所畫

貫雄曰柳營御物一卷飛驒守惟久筆住吉廣行所鑒定也今世所傳本者粟田口夔齋所寫云

補真頼曰長谷雄草子住吉家に傳ふる所は飛驒守惟久なりと云但倭錦には此の草子は見えず

補又曰博物館摹本卷尾云右紀長谷雄卿之一卷應何某朝臣之需摸寫焉原本有故外人不易窺故不能歷他方之審定然竊爲飛驒守惟久之筆而可者乎文化丙寅冬粟田口直隆誌之印と見えたり

十一日^{庚申}春日祭延引尋テ之ヲ追行ス

〔日本紀略〕

醍醐天皇

二月廿三日春日祭

〔西宮記〕

臨時社行幸

延喜十二年二月

略中十一日春日祭不注延引之由

列見

〔貞信公記抄〕

二月十一日不令舉樂爲紀中納言薨也裏書同シ

延喜十二年二月十一日

四二一

長谷雄雙紙トノ依

リテ音樂
挿頭ヲ停

延喜十二年二月十五日 十六日 二十二日 二十三日 二十八日

四二二

〔西宮記〕二月九日云同八年二月十三日、雨儀云云了、中下官障由觸兩

中納言罷出不著穩座、其由依中務卿重喪、去月廿三日、著服音樂、挿頭間非无

所憚、又尊者也、著服音樂事、自隨停止歟、中去延木十二年列見依紀中納言

薨日之近、止件二事、依上卿輕服停止例、未有所見、慥勘舊例、可注置云云、山抄

十五日子除目、

〔公卿補任〕延喜十九年 參議從四位上藤玄上、六十同十二二十五右馬頭、

〔公卿補任〕延喜十三年 參議從四位下橘澄清、五十同十二二月十五日昇

殿、

○橘澄清昇殿ノ事、便宜合敘ス、

十六日丑園、韓神祭、

〔日本紀略〕醍醐天皇 二月十六日、園、韓神祭、

二十二日未大原野祭、

〔日本紀略〕醍醐天皇 二月廿二日、大原野祭、

二十八日丑位祿定、

〔貞信公記抄〕二月廿八日、奏位祿勘文、

二十九日寅臨時仁王會、

〔日本紀略〕醍醐天皇 二月廿九日、仁王會、

〔貞信公記抄〕二月廿九日、戊寅、仁王會、

是月、大納言藤原忠平等二勅シテ、延喜式裁成ヲ促進セシム、

〔延喜式〕序

延喜五年秋八月、詔左大臣從二位兼行左近衛大將藤原朝臣時平、遣從三位

守大納言兼行右近衛大將春宮大夫陸奥出羽按察使藤原朝臣定國中等、

准據開元永徽式例、併省兩式、削成一部、撰定未畢之間、公卿大夫頻年薨卒、仍

同十二年春二月、勅從三位守大納言兼右近衛大將行春宮大夫臣藤原朝臣

忠平、從四位下守右大辨兼勘解由長官橘朝臣澄清等、共隨先業、促其裁成、上

下略、全文ハ延長六年十二月二十六日ノ條ニ收ム、

○延喜式ヲ撰バシムルコト、延喜五年八月是月ノ條ニ、重ネテ其成功

ヲ責ムルコト、延長三年八月是月ノ條ニ見ユ、

公卿大夫
頻年薨卒

延喜五年
ノ詔

延喜十二年二月二十九日 是月

四二三

延喜十二年三月三日 九日 十一日 十六日

三月庚辰朔 盡

三日壬午御燈、

〔日本紀略〕醍醐天皇 三月三日御燈、

九日壬戌櫻花宴、

〔貞信公記抄〕三月九日有櫻花宴、

〔新儀式〕

四花宴臨時上 王卿已下給祿有差、王卿御衣侍臣并樂人給疋絹、絁者召女御女裝束給之、延喜十二年三月九日例也、

十一日庚寅御讀經僧ヲ定ム、

〔貞信公記抄〕三月十一日庚寅定御讀（經カ）僧、

檢非違使ヲシテ政ヲ行フ毎ニ其狀ヲ申サシム、

〔政事要略〕六十一檢非違使糺彈雜事一

別當宣云行政之日雜事依去寬平七年二月二十一日別當宣度別申其狀、若

雖非當日須決差志若府生申者、

十六日乙未圓成寺塔供養、
延喜十二年三月十一日 東市正兼左衛門少尉當世基宗 奉

王卿以下
祿ヲ賜フ
差アリ

忠平參詣

神位記人
位記同時
二捺印ス
内侍所印

〔日本紀略〕醍醐天皇 三月十六日圓成寺塔供養、

〔貞信公記抄〕三月十六日乙未參圓成寺由有塔會也、

十八日丁酉季御讀經、

〔日本紀略〕醍醐天皇 三月十八日季御讀經、

〔貞信公記抄〕三月十八日（丙カ）御讀經始、

二十一日庚子地震、

〔扶桑略記〕二十三裏書三月廿一日庚子午刻地震

二十二日辛丑位記請印、

〔西宮記〕臨時六同十二年三月廿二日神位記、人位記、一度捺印事、内侍所

印二面、朱一墨一北山抄同シ、

二十三日壬寅東宮參觀アラセラル、

〔日本紀略〕醍醐天皇 三月廿二日皇太子參觀、

〔貞信公記抄〕三月廿三日壬寅東宮參入大内、

二十四日癸卯東宮御讀經、

〔貞信公記抄〕三月廿四日宮御讀經始、

延喜十二年三月十八日 二十一日 二十二日 二十三日 二十四日

二十七日、丙子除目、

〔公卿補任〕

四

參議從四位上藤定方、四十右中將、三月廿七日兼近江權守、

○古今和歌集目錄同シ、

〔公卿補任〕

五

天曆元年 參議從四位下小野好古、六十延喜十二三廿七讚岐

權掾、

〔古今和歌集目錄〕

庶人

御春有輔

〔延喜〕

十二年三月廿七日轉〔左衛門〕權少尉、使、

坂上是則

〔延喜〕

十二年三月廿七日任少監物、

〔貞信公記抄〕

三月廿六日、除目始、

廿七日、除目、

〔敍位除目執筆抄〕

延喜十二年三月廿六日京官、廿七入眼、

執筆、

○御春有輔ノ事蹟、便宜左ニ附載ス、

〔古今和歌集目錄〕

庶人

御春有輔

延喜二年二月廿三日任左衛門權少志、十二年三月廿七日轉權少尉、使、敏行

家人、河内國人云々、

〔紀貫之集〕

八部

兼輔の兵衛督の、かも河のほとりにて、左衛門尉みはる

御春有輔ノ傳

藤原敏行ノ家人

河内ノ人

甲斐へ下ル

藤原兼輔
紙貫之等
錢別ス

歌什

有輔ト藤
原利基

のありすけの甲斐へ下るに餞したる日よめる、

君をしむ泪おちます此川のみきはまさりてなかるへらなり

〔勅撰作者部類〕

自帝王至
庶人之部

有助〔六位左衛門尉〕古今集戀三、一、

〔古今和歌集〕

戀三

題玄らす

みはるのありすけ

綾なくてまたきなき名の立田川渡らてやまむ物ならなくに

〔古今和歌集〕

哀傷歌

藤原の利基の朝臣の、右近中將にてすみ侍りける

さうしの身まかりて後、人もすますなりにけるに、秋の夜ふけて、もの

よりまうてきけるついでに見いれければ、もどありし前裁いと茂く

荒れたりけるを見て、早くそこに侍りければ、昔を思ひやりてよみけ

る、みはるのありすけ

君か植ゑし一むら薄虫の音の繁き野へともなりにける哉

延喜十二年四月一日 三日 七日

四月 己酉 朔盡

一日 己酉 旬平座

東院皇后御忌日

〔日本紀略〕

天醍醐

四月一日平座依東院皇后御忌日不御南殿

三日 辛亥 直物

〔貞信公記抄〕

四月三日有直物事

七日 乙卯 擬階奏

紫宸殿出御

〔日本紀略〕

天醍醐

四月七日御南殿依擬階奏也

〔貞信公記抄〕

四月七日上御南殿覽擬階奏但不覽短冊其儀□執奏文率公卿入自日華門列立二省從之勅曰將參來稱唯昇立座後□後立定臣進奉覽

奏文其道從公卿座西直進於御帳東跪而奉□〔扶力〕杖給外記還本所覽了上曰短冊縱之臣稱唯召式部々々唯召兵部々々唯持罷二省唯召各丞各丞參入荷辛櫃退出頃公卿退出

〔西宮記〕

四月 擬階奏

二省候日華門外

門左右立赤辛櫃有臺及枋帶各輔一人

部丞一人代大臣奏略注天皇覽文〔中〕延喜十二年四月七日記云天皇此間

官○中略大略○下略 輔唯上卿宣敕語輔各稱唯入撤櫃○下略

二省ノ丞代官ヲ用

〔延喜〕 延喜十二年大納言仰外記短冊各持退省依例可行者依宣旨仰二省兵部

丞用代官

〔北山抄〕

七年 年中要抄上 四月

延喜十二年四月七日御南殿奉覽奏文之道自公卿座西直進跪御帳東奉之云々〔真御〕

八日 丙辰 日光異アリ灌佛

日食

〔日本紀略〕

天醍醐

四月八日丙辰自辰一點至午二點日有蝕之

〔扶桑略記〕

醍醐天皇書

四月八日丙辰々刻有日食

〔貞信公記抄〕

四月八日灌佛如常

十日 戊午 祈雨奉幣

〔日本紀略〕

天醍醐

四月十日祈雨奉幣使

〔貞信公記抄〕

四月十日戊午有祈雨幣使從去月十七日無雨聞而今日快降

十六日 子甲 成選ノ位記ヲ授ク

〔日本紀略〕

天醍醐

四月十六日天皇御南殿依成選也

二十一日 己巳 除目

〔敍位除目執筆抄〕

延喜十二四廿一日京官入眼 執筆

延喜十二年四月八日 十日 十六日 二十一日

四二九

紫宸殿出御

去月十七日ヨリ雨降ラズ

二十七日、乙亥、直物、

〔貞信公記抄〕 四月廿七日、有直物、

三十日、戊寅、駒牽、

〔貞信公記抄〕 四月廿九日、依雨駒引停止、

卅日、駒引、今日大臣不參、小臣候御前、

〔江次第〕 十九日、臨時競馬事、四月駒牽時者、右近奏音樂、納蘇利、狛犬、次東遊、右駿

河舞、左求子、仁和元、延喜十二、略、中、年等例、少將已下各六人云々、

光孝天皇ノ皇女源周子卒ス、

〔日本紀略〕 醍醐天皇 四月卅日、光孝天皇第十五源氏女周子卒、○一代要記、皇

〔三代實錄〕 光孝天皇 元慶八年六月二日、辛卯、無位、略、中、源朝臣周子、略、中

依去四月十三日勅書賜姓、隸左京一條、○中、預時服月俸、

〔本朝皇胤紹運錄〕

光孝天皇

源周子

雨ニ依リ
テ停止

音樂ヲ奏
ス

源姓ヲ賜
ヒ左京一
條ニ隸ス

五月小己卯朔盡

一日、己卯、

〔西宮記〕 旬十月 天皇御出、監物御鎰奏、○中、二獻、供天酒、給庭立奏、○中、夏此

庭立奏ノ
前ニ扇ヲ
給フ

間給扇、延喜十二、庭立奏之、

〔北山抄〕 四月 年中要抄上 略、○上、番奏之後、二獻之前、暑月給扇、○中、給者先

懷本扇、把笏起座、更挿腰賜扇、又把笏復座、賜畢、次將跪置、管賜自料、以楊宮置

大盤下、或返内侍云々、○中、延喜十

二年、外記記云、无拜、失也、

〔貞信公記抄〕 五月二日、小五月、

五日、節會、武德殿ニ行幸アラセラレ、騎射ヲ覽給フ、是日、名社及ビ十

五大寺ニ於テ、仁王經ヲ讀マシメ、疾疫ヲ祈禳セシム、

〔日本紀略〕 醍醐天皇 五月五日、節會、名社並十五大寺、讀仁王經、祈疾疫事、

〔貞信公記抄〕 四月廿七日、府手結、

五月五日、幸武德殿、

六日、今日無廚御贄、

拜ナシ

手結
武德殿出
御

延喜十二年五月十五日 十六日 二十三日

四三二

十五日巳少僧都觀賢ヲ東寺法務ニ、權律師禪安ヲ同權法務ニ補ス、

〔僧綱補任〕〇興福寺本

小僧都觀賢 東寺別當、五月十五日兼法務、

律師 師慈念 同日兼法務、

權律師 禪安 五月十五日兼法務、（權説之）

〔東寺長者補任〕一 長者少僧都觀賢 五月十五日兼法務、益信替、歷六箇

年補之、同日禪安律師任權法務、一寺二人相雙第二度例也、聖寶替經四箇年、
十六日甲午旬、

〔貞信公記抄〕五月十六日、上御南殿、

二十三日辛丑賑給、

〔日本紀略〕醍醐天皇 五月廿三日、賑給、

權中納言藤原道明ヲ東大寺俗別當ニ補ス、

〔正倉院文書〕一 東南院文書 櫃第四卷

到來閏五月七日、同九日白堂了、

太政官牒、東大寺

益信聖寶
ノ替

紫宸殿出
御

長谷雄ノ
替

權中納言從三位藤原朝臣道明

右光右大臣宣奉勅、伴人宜補彼寺別當中納言紀朝臣長谷雄薨卒之替者、寺宜
承知、依宣行之牒、到准狀、故牒、

延喜十二年五月廿三日 右大史正六位上大春日朝臣□□牒

參議左大辨從四位上兼行式部大輔讚岐權守藤原朝臣（清實自署）〇（清實自署）本書、太政官印
奉行

別當（自署下同シ）智愷 都維那寬宙

上座

權上座威儀師

寺主峯皎 同月十四日白堂了、

延喜十二年五月二十三日

四三三

延喜十二年閏五月一日 五日

閏五月小 戊申朔

一日、戊申、日食、

〔日本紀略〕醍醐天皇 閏五月一日、戊申、天晴、日有蝕之、

〔貞信公記抄〕 閏五月一日、夕蝕、

〔扶桑略記〕二十三日裏書 閏五月一日、戊申、日食、廢務、

五日、壬子、除目、

〔貞信公記抄〕 閏五月五日、除目、

近江ノ正稅ヲ以テ、延曆寺楞嚴院ノ佛燈供米ニ充ツ、

〔慈覺大師傳〕 延喜十二年閏五月五日、楞嚴院佛燈供米、停內藏寮所充行、以

近江國正稅准行之、○日本高僧傳要文抄同シ

〔山門堂舍記〕 一楞嚴三昧院、在砂碓堂東北地上

燈油三斗六升、月別三升、白米十四石四斗、月別一石二斗、僧二口料、延喜十二年五月五日官

符、

〔如法經濫觴類聚記〕 延喜十二年壬申七月五日、燈油佛僧供、官符下知近江

國、油三升六合、白米十石四斗二僧料

二十日、卯郡司召、

〔貞信公記抄〕 閏五月廿日、任郡司、

二十六日、癸酉女御藤原穩子退出アラセラル、

〔貞信公記抄〕 閏五月廿六日、御息所退出、

延喜十二年閏五月二十日 二十六日

延喜十二年六月二日 三日 五日

六月丁丑朔

二日寅祈雨奉幣

〔日本紀略〕醍醐天皇 六月二日祈雨奉幣諸社

〔貞信公記抄〕 六月二日戊寅祈雨幣使立

三日卯彗星見ハル

〔日本紀略〕醍醐天皇 六月三日己卯戌亥角彗星見至九日見之

十二日戊子彗星見西方

〔扶桑略記〕二十三裏書 醍醐天皇 六月三日己卯始自今夜戌亥角彗星見五六日同

八日甲申見辰巳九日乙酉見乾方十二日戊子見西方

〔中右記〕 長承元年九月六日

延喜以後彗星見年々

同十二年六月三日

〔諸道勘文〕五十四 勘申彗星年々事

同十二年六月三日彗星始見戌亥方經七日夜○一代要記同

五日巳貞賴親王近江津田莊ヲ叡山西塔院ニ施入セラル

〔四大寺傳記〕延曆寺

一西塔釋迦堂

奉施近江國蒲生郡津田庄貞賴親王家 延喜十二年六月日

〔叡岳要記〕下 釋迦堂

奉安置半金色尺迦佛像一軀居高三尺根本大師本願

蓮華座綠色 舊座依破壞以延喜年中被改造第七座主猷憲 天蓋一具綠色 在中虛

鏡一面徑一尺懸尺迦御頂延喜年中平錄法師所造

金色普賢文殊各一躰和年中故明琳法師願

綠色梵天帝尺各一躰五尺延喜年中仁意法師所造

綠色四大天王各一躰七尺延喜年中清和第十宮願

木像文殊一躰天慶年中

四品貞賴親王家 奉施近江國菟生郡津田庄一處

右檢案内延曆寺西塔院四王像者是依家願昔日奉造所安置也年來以件庄地子稍便充燈分仍今副彼券文永年施入既訖雖物輕於飛塵而志重於華岳

延喜十二年六月五日

延喜十二年六月十日 十一日

四三八

以天王之福護爲地主之善緣敬白

延喜十二年六月五日

從代丈部典信信典イ

扶葛井安常

別當前豐前守大神朝臣

御監蔭孫程

十日丙戌御體御卜

〔日本紀略〕醍醐天皇 六月十日御卜依血下穢於建春門外令卜之

〔園太曆〕觀應元年十月五日

一大嘗會條々穢中其沙汰可爲何樣哉可注進先傍例事

延喜十二六十御體御卜依有血下穢於建春門覽上卿付內侍所

十一日丁亥穢ニ依リテ月次神今食ヲ延引ス尋デ之ヲ追行ス

〔日本紀略〕醍醐天皇 六月十一日神今食延引依內裏血下穢也

十五日月次神今食

〔真信公記抄〕六月十一日依內裏穢停止神事大祓

十五日辛卯神今食月次

大祓ヲ修ス

二十六日寅主仁王會

〔日本紀略〕醍醐天皇 六月廿六日仁王會

〔真信公記抄〕六月十七日定仁王會請僧

廿六日壬寅仁王會

是月雷鳴陣

〔西宮記〕六月雷鳴陣 大將召左將監名稱唯置笠西面立庭中召右如左儀大將

仰云陣解个將監等稱唯左召大殿昇二音稱唯仰云下於利右如前將監等立

本列率近衛出次將出無大將者他上卿仰之略中无上卿者內侍仰左中將解

陣略中延喜十二年定方

請僧ヲ定ム

解陣ノ儀

延喜十二年六月二十六日 是月

四三九

延喜十二年七月四日 七日 二十七日

七月 丙午 朔

四四〇

廢務

四日酉廣瀨、龍田祭、是日、丹生、貴布禰二社二奉幣シテ、雨ヲ祈ル、

〔西宮記〕臨時一 祈雨 延喜十二年七月四日、廣瀨、龍田祭、仍廢務如常、今日依祈

雨、丹生、貴布禰奉幣出立、是弘仁十四年七月四日、依祈雨、和泉國大鳥、積川等社、依奉幣之例所行也云々、

七日壬大神宮二奉幣ス、

〔貞信公記抄〕七月七日、壬子、向八省、行伊勢幣事、

二十七日壬申、相撲召合、東宮入觀アラセラル、尋テ、追相撲アリ、

〔日本紀略〕醍醐 天皇 七月廿七日、壬申、相撲召合、於南殿行之、

廿九日、有追相撲事、

〔貞信公記抄〕七月九日、可有召合之狀、仰諸衛、

十一日、到府定召合事、

廿日、向府、

廿二日、依試樂向府、

廿七日、相撲召合、東宮入觀、

歸變アリ

召合御覽

右勝ッ

廿八日東宮入觀、

八月八日、相撲歸變、

〔西宮記〕七月十六日相撲式 同十二年七月廿七日御記云、覽召合云々、次侍從

參入侍座、先例侍從等申請、當時召相撲、右勝數二、決勝負、只最手不右亂聲奏納曾利

訖、左奏陵王、左負已不可奏、因給左方別當式部卿親王、右大臣等罰酒、只舞遣

而舞者已在庭中、因更仰令果、次右奏新鳥蘇、未訖還殿云々、廿八日、依右大臣

申召侍從云々、還清凉殿、更召親王左右大將、賜酒奏絃歌、賜參議以上御衣有

差云々、

〔西宮記〕七月童相撲 同十二年七月廿七日召合、左負奏龍王、罰酒式部卿親王

及右大臣等、可方

〔北山抄〕七月二年 相撲召合下事、天慶八年、御覽畢、大納言師輔卿率親王下殿

於階下有飲酒事、櫻樹乾角立胡床、承和及延

〔樗囊抄〕年中行事 追相撲隔日例、延喜十二、七、廿九、一昨

○二十八日、東宮入觀アラセラル、コト、便宜合敘ス、

參議以上
ニ御衣ヲ
賜フ

延喜十二年七月二十七日

四四一

延喜十二年八月二日 十二日 十五日 二十三日

四四二

八月丙子朔盡

二日丁丑釋奠

〔北山抄〕

二月 年中要抄上事 天曆三年八月音博士不參以本寮允大江遠以為代官成業在衛卿仰延喜十二年例也

〔江次第〕

五月 二月 音博士代用寮允 成業例 延喜十二年

十二日亥季御讀經

〔日本紀略〕

醍醐 天皇 八月十三日季御讀經

〔貞信公記抄〕

八月□二日丁亥御讀經始

十五日庚寅駒牽

〔貞信公記抄〕

八月十五日依雨不覽御馬親王以下就中陪馬寮各取五疋親王以下賜之此間日暮甚狼藉也所司取遺馬了親王公卿參陣頭令奏慶舞蹈

二十三日戊戌天長格抄ヲ勘解由使ニ貸與ス

〔類聚符宣抄〕

六 文譜

勘解由使

請被下宣旨借給天長格抄一部卅卷事在外記 曹司

兩ニ依リ
御馬ヲ御
覽セズ

一部三十
卷外記十
司ニ在リ

右謹檢案内使司依太政官去年五月四日符旨修撰交替式而件式所載官符其文多疑案據為煩如今彼本官符等皆在件書中望請被下宣旨暫借給正其紕繆將遂撰定但事畢之後即將返納

延喜十二年六月九日

主典英保時幹

判官壹志作範

大納言藤原朝臣忠平宣宜依彼使請申借給件格抄者

同年八月廿三日

少外記伴久永 奉

同十四年九月十日且返奉廿五卷史生物部吉門十六日依數返奉了勘解由主典秦貞興

○勘解由使ヲシテ交替式ヲ修撰セシムルコト十一年五月四日ノ條

ニ官曹事類大同抄ヲ勘解由使ニ貸與スルコト十四年十月十六日ノ條

ニ内外官交替式ヲ奏進スルコト二十一年正月二十五日ノ條ニ見

二十四日己亥信濃駒牽

〔西宮記〕

八月 駒牽次 延喜十二年八月廿四日休日也諸卿不參於清涼殿覽信

休日

延喜十二年八月二十四日

四四三

清涼殿ニ
テ御馬御
覽アリ

延喜十二年八月二十四日

四四四

濃御馬廿疋、參議定方候御前、左右寮擇取御馬如常、此日國解文、主當寮進藏人所、頭左少將恆佐奏之、抄同シ、北山
東宮御讀經始、

〔貞信公記抄〕八月廿四日、己未、宮御讀經始、而有障不參、

九月大乙巳朔盡

七日、辛亥神泉苑ヲ實檢ス、

〔日本紀略〕醍醐天皇 九月七日、實檢神泉苑、

九日、癸丑節會、重陽宴、

〔日本紀略〕醍醐天皇 九月九日、癸丑、重陽宴、題云、爽籟驚幽律、

〔貞信公記抄〕九月九日、今日初行内辨事、季來日記、召刀禰者、而今日可召大

夫等、仍今日召大夫等云々、

十一日、乙卯穢ニ依リテ、伊勢例幣ヲ延引ス、尋テ、之ヲ追行ス、

〔日本紀略〕醍醐天皇 九月十一日、例幣延引、依内裏穢也、

十七日、奉幣伊勢大神宮、例幣也

〔貞信公記抄〕九月十七日、辛酉、向八省、行伊勢御幣事、下日例事、依内裏穢、

今日行之、

詩題
忠平内辨
卜爲ル

延喜十二年九月七日 九日 十一日

四四五

延喜十二年十月一日 五日

十月大 亥朔 盡

一日、乙旬、是日、御遊アリ、

紫宸殿出

〔日本紀略〕醍醐 十月一日、乙亥、旬、出御南殿、有絃歌事、

〔貞信公記抄〕十月一日、上御南殿、其儀如常、至于晚頭、內侍召小臣(崇)云々、到御

帳頭而跪、勅曰、喚式部卿親王、小臣稱唯退出、令少將立草蓐橫座、臣先著之、召

親王等、其後賜恩蓋、奏管絃、但自餘親王以下、猶侍本座、又殿上侍臣能歌者一

兩人、依(名)祇候、今夜親王以下無別祿、

〔西宮記〕十月 延喜二十一年、無廚獻物、今日別有御遊、

天曆三年十一月一日、中酒番侍從一人候、望給代官、中延喜十二年日記、

同有一人、不注代官事、略下

〔京都御所東山御文庫記錄〕野甲一 長和二年四月一日、壬戌、中近代夏

旬無壁代、中申刻出御南殿、略中 三獻後左右近亂聲各奏二曲、各奏罷出音

聲、延喜十二年十月一日御記、左右近奏樂、往年例、先亂聲、

五日、己除日、

〔公卿補任〕延四喜廿一年 參議從四位下藤邦基、四十同二十五左少辨、

〔三十六人歌仙傳〕正四位下行右京大夫源朝臣宗于 (延喜)十二年十月五日兼

三河權守、

十日、甲興福寺維摩會、

〔維摩會講師研學豎義次第〕(延喜)十二年、壬講師義濟 (年七十、去年十月廿八日宣十一日請

聖寶僧正、資、研學基高 (年五十七、去年十月廿八日宣十一日請

〔三會定一記〕一 同十二年、去年十月宣講師義濟 (元興寺、法相宗兼真言宗、元興寺

喜 喜 同十二年、去年十月宣講師義濟 (元興寺、法相宗兼真言宗、元興寺

十一日、乙國司任終ル年ノ雜米ノ返抄ハ、當任ヲシテ請ハシム、

〔江次第抄〕四定受領功課事 雜米返抄、寬平九年以往、當任請也、略注、同十年

二月廿七日官符、略中 令後司請也、前任三年也、而依延喜十二年十月十一

日官符、猶當任請也、勘解由使申返、如寬平

是月、菊花宴、

〔新勅撰和歌集〕冬六歌 延喜十二年十月、御前のやり水のほとりに菊植て、

御遊ひ侍りける次によませ給うける、延喜御製

水底にかけをうつせる菊の花浪のをるにそ色まさりける

延喜十二年十月十日 十一日 是月

四四七

御製

四四六

天盃ヲ賜

延喜十二年十月是月

源公忠朝臣

四四八

おく霜に色染め返しそほちつゝ花の盛は今日なから見む

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

十一月乙巳朔盡

一日、乙巳、日食、

〔日本紀略〕天醒醐 十一月一日、乙巳、天晴、日蝕、廢務、扶桑略記

〔貞信公記抄〕 十一月一日、々蝕、

二日、丙午、御曆奏、

〔貞信公記抄〕 十一月二日、上御南殿、

〔樗囊抄〕御曆奏 二日例

延喜十二年、依蝕、

二十日、申子、大原野祭、是日、重明親王、朝覲アラセラル、

〔日本紀略〕天醒醐 十一月廿日、大原野祭、

〔貞信公記抄〕 十一月廿日、甲子、重明第四皇子朝覲、

二十二日、寅寅、紫宸殿ニ出御アラセラル、

〔日本紀略〕天醒醐 十一月廿二日、御南殿、

二十三日、卯、新嘗會、

〔貞信公記抄〕 十一月廿二日、三丁卯、候大齋、

延喜十二年十一月一日 二日 二十日 二十二日 二十三日

四四九

廢務

紫宸殿出御

日食ニ依リテ延引ス

延喜十二年十一月二十七日

廿四日、奉仕内辨、

二十七日、辛未職曹司式ヲ定ム、

〔貞信公記抄〕十一月廿七日、職曹司定式事、

十二月大甲戌朔盡

六日己卯大神宮臨時奉幣、

〔日本紀略〕醍醐天皇十二月六日、伊勢臨時奉幣、

〔貞信公記抄〕十二月六日、依召夜參、

十一日甲申月次祭、祈年穀奉幣、

〔貞信公記抄〕十二月十一日、行幸中院、今日祈年穀幣奉伊勢、

〔北山抄〕十二年十一月中要抄下六月 縫殿寮有穢、於御匣殿令裁縫御服例、喜延

十五日戊子律師慈念寂ス、

〔日本紀略〕醍醐天皇十二月十五日、律師慈念卒、

〔僧綱補任〕二興福寺本 律師慈念 十二月十五日入滅、〔朱書〕七十九

〔僧綱補任〕二興福寺本 權律師慈念 延喜四年二月廿九日任、法相宗、藥

師寺、已講勞、阿波國人、漢人氏、〔朱書〕七十一同五年八月八日轉正、〔朱書〕七十二同十二年

五月十五日兼法務、

〔三會定一記〕一同三年〔昌泰〕東大寺嘉講師慈念、藥師寺法相宗、

延喜十二年十二月六日 十一日 十五日

延喜十二年十二月十八日 十九日 二十一日 二十二日

四五二

延喜四二、任律師同五八、正同二十二、卒阿波國人漢人氏

京中火アリ、尋デ、罹災者ニ米ヲ給フ、

〔扶桑略記〕醍醐天皇書 十二月十九日、仰檢非違使、令勘申去十五日失火

舍宅人々、各即給米粒、

十八日卯辛大神祭、

〔貞信公記抄〕十二月十八日、辛卯、有報祭使、

十九日辰壬御佛名、

〔貞信公記抄〕十二月十九日、内御佛名始、

二十一日午甲荷前、

〔貞信公記抄〕十二月廿一日、甲午、荷前、其儀如例、

二十二日未乙中納言源湛、上表シテ致仕ヲ請フ、

〔公卿補任〕四 中納言從三位源湛八、十按察使、十二月廿二日上狀請致仕、

不許、

參議藤原定方、尙侍藤原滿子四十ノ算ヲ賀ス、

〔紀貫之集〕七賀部 延喜十二年十二月春立朝、定方の左衛門の督(藤原滿子)の内侍督

許サズ

立春

の賀奉りける時の歌、

今年おひのにひくはまゆの唐衣千世をかけてそ祝ひそめつる(けい)
岩の上にもちりもなけれと蟬の羽の袖にのみこそ拂ふへらなれ
年をのみ思ひつめつゝ今までに心にあけるこころのなき哉
年のうちに春立ことを春日のゝ若菜さへにもしりにける哉
住の江のまつ煙もよとゝもに浪のかすにそ數ふへらなる

○本書、日ヲ記サズ、日本長曆ニ據リテ、此日ニ掲グ、

〔参考〕

〔日本長曆〕下醍醐 延喜十二年壬申、十二大戌甲二十日立春、

〔埤史料〕十六醍醐天皇事記 按、尙侍者定方姊滿子也、明年初盈四十、而今賀之

者、盖依立春也、

延喜十二年十二月二十二日

四五三

延喜十二年是歲

四五四

是歲、勘解由使、四度公文等ノ請進及ビ駒直ノ收納ヲ怠ル前司ノ赦ニ會
フトキノ事ヲ勘判ス、

〔政事要略〕五十七 雜公文事 上 交替雜事 十七

勘解由使勘判抄

四度公文并返抄事略○中

豐後前司藤世武

常赦判云、未請之怠、同在恩前、亦須後任相承、今年々使、專當郡司等請進、莫拘

前司、延喜十二年判

〔政事要略〕五十五 馬牛事 交替雜事 十五

勘解由使勘判抄

一厩牧事

課闕駒直略○中

信濃前司小乃清貫

常赦判云、件駒直不收之怠、前司會赦、須見任相承、令監并長帳牧子等、依格辨
備、莫拘前司、

及度公文
ハ使等抄
シテ請進

駒直ハ見
任ノ監等
ヲシテ辨
備セシム

延喜十二年判

是忠親王ノ男清平王ニ源朝臣ノ姓ヲ賜フ、

〔尊卑分脈〕光孝 源氏

是忠親王

源清平參議、太宰大貳、正四下、延喜十二年賜姓、

延喜十二年是歲

四五五

年末雜載

神社、

忠平石清水宮ニ參ル

〔貞信公記抄〕三月廿日、己亥、參石清水宮、

佛寺、

〔正倉院文書〕東南院文書 壹櫃第三卷

東大寺ノ僧會祿等ノ補任

太政官牒、東大寺

傳燈滿位僧會祿年五十三 萬卅三

右寺主傳燈法師位峯皎秩滿之替、

傳燈滿位僧觀實年五十六 萬卅六

右都維那傳燈滿位僧寬宙秩滿之替、

傳燈滿位僧觀紹年卅三 萬卅三

右造寺所知事傳燈住位僧泰蓮秩滿之替、

右權中納言從三位藤原朝臣道明宣、伴僧會祿等、依彼寺別當傳燈大法師位智愷牒狀、補任如件者、寺宜承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、

延喜十二年十二月十五日 正六位上行左少史御船宿禰〔自學下同シ〕常方

安居

忠平極樂寺ニ詣ッ

從五位上守右少辨藤原朝臣〔奧書〕○本書、太政官、以同十三年正月二日、白堂已了、奉行

〔貞信公記抄〕四月一日、安居之間、无台一燈、

五日、參向極樂寺、爲□□也、

十月九日、癸未、參向極樂寺、有供菊花音樂事、

廿三日、丁酉、參向慈恩寺、

〔朝野群載〕銘一 文筆上 總持寺鐘銘并略記

藤原公利總持寺ノ鐘ヲ鑄造ス

粵若祖父越前守藤原朝臣〔山陰〕、歸心於普門妙智、傾首於無礙大悲、而墜露溘然、閃電倏爾、納言尊考、軫先業之不遂、歎善因之未成、多以黃金、附入唐使大賀御井、買得白檀香木、造千手觀世音菩薩像一體、仍建道場於攝津國島下郡、安置此像、號曰總持寺、於是第二男〔五子〕、備前權介公利鑄豐鐘一口、于時延喜十二年夏四月八日、〔略記〕上爲銘曰、

命大鑪冶 施倕師工 鴻鐘協律 鳧乳應梵 聲徹霄漢 響々晚風 感動隨聽 懺悔生夢 做告諸佛 唱導大衆 雖遠必達 無幽不通 悲想

延喜十二年雜載

銘文

祖父高房ノ創立

慧下 阿鼻獄中 長夜知曉 妄有歸空 觀音依願論 先公善功 俱滿三界
 拔出樊籠○扶桑鐘集同
 ○公利ノ父山陰ノ總持寺ヲ建立スルコト、仁和四年二月四日ノ條ニ見ユ、

諸家、

〔貞信公記抄〕三月十四日、癸巳、河臨解除、

〔貞信公記抄〕三月十一日、庚寅、此夜請昭律師修善始、

十一月廿六日、修善始、昭關梨、

賣買、

〔東寺百合文書〕○卷十之十二

七條令解 申立賣買家券文事

合壹區地肆戶主、在一坊十五町西一行北四五六七門、

立物

三間檜葺板敷屋壹宇、在庇四面并又庇西北、又在小庇南面

五間板屋貳宇、在一宇庇南西面、在一宇庇西面

忠平河臨
祓ヲ修ス
忠平佛事
ヲ修ス

山背大海
賣家券
文

延喜錢ヲ
以テ買得
ス

陽成院釣
殿宮舍人

主料職料
ノ家券二
通ヲ製ス
券本白紙

中門壹處

間貳處大

右得散位正位上山背忌寸大海當氏辭狀備、已家以延喜錢陸拾貫文充價直、

賣與左京一條防戶主中納言從三位兼行陸奧出羽按察使源朝臣湛戶口

正六位上同姓理既畢、望請依式欲立券文者、令依辭狀加覆審所陳有實、仍勒

賣買兩人并保證等署名、立券文如件、以解、

延喜十二年七月十七日

令從八位上縣犬養宿禰阿古繼

賣人散位正六位上山背忌寸大海當氏

買人正六位上源朝臣理

主料

（繼目裏ニ、伯耆禪師外四人ノ白誓アリ、其上ニ割印二類ヲ踏ス）

保證

陽成院釣殿宮舍人長宮處、今水

右衛門府生正六位上佐伯宿禰、忠生

內暨從七位上布敷、常藤

左京職判、収家券貳通、一通職料、依延喜二年五月十七日本券、并同八年九月

十九日白紙券等判行如件、同十二年八月廿八日、

延喜十二年雜載

四五九

大夫源朝臣長賴

大進平

少進小野高枝

小野

亮兼伊勢權大掾藤原朝臣三仁

大屬阿刀平緒

少屬許西郡久範

小屬關○本書左京職印
三十二類ヲ踏ス

副券

(繼日表、伯耆權師外四人ノ自署アリ、其上ニ副印ニ類ヲ踏ス)
充行私宅事

在條坊券文 但東七條宅者

右男市童子并母橘美子等副券文所充行如件

延喜十九年四月廿一日

源理

雜

山雞左衛門陣來集

〔日本紀略〕

醍醐天皇 九月十九日、山雞來集、

〔扶桑略記〕

醍醐天皇 九月十九日、癸亥、午刻山雞自丑寅方飛來、集左衛門陣上卿座上、飛去北方、

延喜十三年癸酉

正月大辰朔

一日甲辰朝賀、節會

〔日本紀略〕

醍醐天皇 正月一日、甲辰、時々雨下、天皇幸大極殿、受朝賀、還宮宴會、

〔貞信公記抄〕

(忠平) 正月一日、有朝拜儀、小臣內辨、宴會如例、但今日刀禰參入、是違例、

〔西宮記〕

朝拜上 (延喜十三年) 同年御記云、辰二刻御八省、式部卿親王、參議定方朝臣供奉御前、御出時、定方朝臣、畢奏賀者、參議仲平朝臣奏瑞、左馬頭玄上朝臣共進、互奏之、

〔西宮記〕

正月 延喜十三年正月一日、乘輿御八省云々、未三刻還宮、申三刻出御南殿云々、一獻後仰令雅樂奏樂、例三獻終奏樂而入夜、仍仰令忽御記也、

〔北山抄〕

九幸 羽林要抄 (前書) 延喜十三年正月一日、八省行幸云々、參議中將定方朝臣召舍人云々、

一日、院宮大饗

延喜十三年正月一日 二日

大極殿出

仲平瑞ヲ奏ス

還御 紫宸殿出

〔真信公記抄〕 正月二日、院宮饗如常、

三日、丙午仁和寺ニ朝覲行幸シ給フ、

〔真信公記抄〕 正月二日、入夜召仰行幸事、

三日、行幸仁和寺、

四日、未東宮竝ニ童親王朝覲アラセラル、

〔真信公記抄〕 正月四日、東宮朝覲、童親王亦同、

七日、庚戌節會、敍位、大納言從三位藤原忠平ヲ正三位ニ敍ス、

〔日本紀略〕 醍醐天皇 正月六日、敍位議、

〔真信公記抄〕 正月六日、敍位議、（略）西宮記引ク所ノ本書アリ、注

忠平執筆
又節會内
辨ヲ勤ム

七日、有産事而依召參入、行内辨事、

〔西宮記〕 正月中會 天皇出御、警蹕、内辨著兀子、内侍置位記筥、（略）延喜十

出前置之、以頭藏
人示内侍置之、

〔台記〕 久安四年正月一日、庚申、勤年々吏部記、九記、（略）中七日女樂依夜深略

女樂ヲ奏
ス

之由、見年々吏部記、然而亦記經奏聞之由、延喜十三年（略）中七日御記依入夜
減舞數、不記奏由、

〔公卿補任〕 四

大納言從三位藤忠平、（略）右大將、正月七日正三位、

參議從四位上藤枝良、（略）同十三正七從四位上、

〔公卿補任〕 五承平七年 參議從四位上藤顯忠、（略）延喜十三正七從五下、（略）東宮

〔外記補任〕 二 大外記外從五位下大藏良實、正月七日敍、

八日、辛亥女敍位、

〔真信公記抄〕 正月八日、有女、敍位、

〔日本紀略〕 醍醐天皇 正月十一日、甲寅、女敍位、

○本書十一日ニ係ク、今真信公記抄ニ據ル、

十二日、乙卯卯杖ヲ上ル、

〔日本紀略〕 醍醐天皇 正月十二日、乙卯、所司依例進卯杖、依雨不御南殿、付内侍

所、

〔真信公記抄〕 正月十二日、御杖、雨儀行之、

〔西宮記〕 正月上 御杖、（略）延喜十三年正月十三日、依雨春宮坊并大舍人、左右兵衛、

付内侍所奏之、

延喜十三年正月八日 十二日

東宮御給

雨儀
内侍所ニ
付ス

十四日踏歌

〔西宮記〕

正月下踏歌事

延喜十三正十四踏歌參所々尙侍并一親王宿所等

〔河海抄〕

初音 玉鬘並一

延喜十三年正月十四日丁巳御記曰此夜有踏歌

歌頭等ニ
祿ヲ賜フ
女御穩子
等ノ曹司
踏ニ到リテ
舞ス

事晚頭風雪及戌刻雪晴亥一刻踏歌人等參入於右近陣前班管絃此時卽意
子中務卿親王常陸太守親王大納言藤原朝臣權中納言藤原朝臣參議仲平
朝臣定方朝臣等侍簀子敷舞人等進到竹架東頭列立先奏調子次奏万春樂
漸進南北摠三度訖當御前分立言吹吐詞持囊荷綿卽奏絹鳴曲次奏此殿此
間內藏寮立臺盤食竹東遍掃部施床子奏歌了行著床子親王公卿等下殿行
酒三四巡後管絃更調歌竹川曲便地列庭中內侍藏人等持被綿給階座歌頭
以下舞童以上雙々舞進上階給綿彈琴以下樂人等令了歌我家曲退出時子
一刻自瀧口到東宮息所曹司踏舞弘徽次尙侍曹司飛香次承香殿息所和子麗景
次克明親王直廬昭陽次參入東宮寅四刻還參入內裏候右近陣前召之東庭
掃部給給酒肴令奏絃歌三四曲後給祿歌頭給袂子雅樂物師等給疋絹卽入內
歌舞人等退出于時卯三刻

〔貞信公記抄〕

正月十四日有男踏歌事仍入夜參入依心神不調不參八省

男踏歌

紫宸殿出

十六日未女踏歌

〔日本紀略〕

醍醐天皇

正月十六日己未御南殿女踏歌也

〔西宮記〕

正月下踏歌

延喜十三年正月十六日雅樂不具治部卿及別當爵酒无御出

十七日庚申射禮

〔貞信公記抄〕

正月十七日依固物忌不參今日主上不出御

十八日辛酉賭弓延引尋テ之ヲ追行ス

〔日本紀略〕

醍醐天皇

正月十九日壬戌賭射

〔西宮記〕

恒例一前田家大永鈔本

延木十三正十八從昨日雨降外記奉仰勘雨儀例无所見云々上卿奉仰今日停止之狀被仰外記了召仰四府云々

〔貞信公記抄〕

正月十八日賭射依雨停止

十九日賭弓左勝

二十一日甲子內宴

〔日本紀略〕

醍醐天皇

正月廿一日甲子內宴題云何處春光到

〔貞信公記抄〕

正月廿二日內宴

詩題

引十八日延